

## 二 中立国を通じた和平打診

949 昭和20年3月9日 在スウェーデン岡本公使より  
重光外務大臣宛(電報)

### 連合国側における日本からの和平打診説について

ストックホルム 3月9日 発  
本省 3月12日前10時20分着

第一五九號

諜報者報告(六日)左ノ通

中立維持ノ確約ヲ取付クル必要アリトシ重光外相ニ蘇聯ニ赴キ直接交渉ヲ行フコトヲ勧告セリトノ噂モ傳ヘラレ之等極端派ハ蘇聯ノ確約ヲ取付クル爲ニハ南樺太ノ讓與滿洲支那ニ於ケル蘇聯ノ地位ノ承認日本國內體制ノ修正(資本主義ノ修正民主政治ノ復活)等ノ條件ヲ承認スルモノ已ムヲ得スト主張シ居レリト傳ヘラル

一、英米側ニテハ最近頻リニ日本ノ和平打診ヲ報シ居ル處當地英米人方面及瑞典人ノ間ニ於テモ最近ノ話題トナリ獨逸人中ニモ之ヲ耳ニシ憂慮シ居ル者アリ右噂ハ日本實業界知識階級及宮廷方面ニ於テ和平論擡頭シ英米トノ接觸ヲ求メシコトヲ主張スル者多シト云フニアリ又皇族カ首相ト成ラルヘシトノ新聞報道現ハレタルニ對シテモ現狀ニ於テ日本國民ヲ和平ニ導キ得ルハ皇族以外ニ無シトノ理由ヲ舉ケ居レリ

他方日本ノ右翼極端派ハ對英米戰ヲ完遂スルニハ蘇聯ノコトヲ許シ蘇聯ノ進出ニ對抗セシムルコトヲ得策ト考フ

## 二 中立国を通じた和平打診

ル時ニ於テノミ日本英米間ノ和平可能ナリ他方蘇聯ハ又極東ニ於テ英米トノ對立ヲ豫想スル場合ニ於テノミ日本トノ了解ニ達スルコトヲ得策ト考フヘク

極東ニ於テ英米トノ間ニ了解成立シ將來何等重大利害ノ衝突ヲ豫想セサル場合ニハ假令日本側ヨリ重大ナル讓歩ヲ提議スルモ日本ト積極的了解ハ結ハサルヘシ即チ現段階ニ於テ日英米間ニ和平可能ナル時ハ同時ニ日蘇間ニ了解モ可能トナルヘク何レカカ不能ナル場合ハ他モ亦見込ナカルヘシト觀測セラル

尙蘇聯ハ羅馬尼等ニ對スルト同巧異曲ノ遣方ニテ支那ニ進出セントシ居ルモノノ如ク(最近蘇聯新聞ハ支那問題ヲ大キク取扱ヒ右ノ如キ趣旨ニテ論評シ居レリ)即チ國

内政治ニ於ケル左翼分子ノ勢力増大ヲ計リ次テ政治的ニ之ヲ自己ノ傘下ニ引込ム戰術ヲ採ルモノト觀察セラル若シ日本ニシテ噂ノ如キ讓歩ヲ行フコトアリトセハ蘇聯ハ政治的ニ満洲支那ハ素ヨリ日本ニ迄進出シ來ルヘク極メテ危險ナリト言ハサルヲ得ス

タルカ未タ聯立内閣ノ存續問題トナルモノトハ考ヘラレス瑞典ハ最近對獨通商ノ停止「ナビーサート」ニ依リ對南米貿易ノ減少ニ依リ物資次第ニ減少シ物價騰貴シ割引率ノ引上ニ依リ「インフレ」的傾向促進サレ國內問題ハ次第ニ惡化ノ傾向ニアリ政界ノ一部ニテハ特ニ芬蘭ニ於ケル來ルヘキ選舉ヲ前後トスル政治情勢ノ推移ニハ大ナル關心ヲ拂ヒ居リ其ノ瑞典政情ニ對スル影響ハ保守黨方面ニ於テ憂慮シ居レリ現瑞典「ハンソン」内閣ハ或意味ニ於テハ左傾ヲ防止シ居ルヲ以テ個々ノ具體的施策ニ對シテハ反對アルモ保守黨右翼モ結局同内閣ニ付支持ヲ續クル外ナシト爲シ居ルモノノ如シ

950

昭和20年4月16日

在スウェーデン岡本公使より  
東郷外務大臣宛(電報)

### スウェーデン駐在武官の動向につき注意喚起

ストックホルム 4月16日後1時35分発  
本 省 4月18日前1時55分着

第二五二號(緊急、(電報)館長符號、親展、極祕)

三、金屬労働者罷業ノ問題(往電第一四六號御參照)ニ關シ保守黨議員六名政府ノ措置ニ不滿ナル旨共同聲明ヲ發表シ

一、最近伯林ヨリ大矢海軍大佐武官トシテ當地ニ來ル旨聞込

ミタルニ依リ當館附海軍武官ニ質シタル處本件ニ付テハ  
海軍省ニ確ムル爲海軍省ニ電照中ナリ自分ハ何事モ承知  
セストノコトナリシカ十四日ニ至リ陸軍武官本使ヲ來訪  
シ大矢<sup>(箭)</sup>大佐ハ既ニ任命セラレタルモノニシテ本件ニ付テ  
ハ先般伯林ニ出張ノ際海軍阿部中將等ヨリ自分ニ依頼ノ  
次第アリ自分ハ當地陸海軍ヲ通シテ先任者ナルニ依リ此

ノ資格ニ於テモ至急入國斡旋方御願シタシト述ヘタリ依  
テ本使ハ苟クモ當館附武官ヲ更迭スルモノナル以上海軍  
省ヨリ外務省ヲ通シテ通告アルカ若クハ直接海軍ヨリ正  
式ニ本使ニ通告アルヘキモノト思考ス尙當國外務省ハ增  
員ヲ認メストノ態度ヲ執リ居ル處現武官ハ入替ニ獨逸ニ  
轉出スルモノナリヤ(現狀ニテハ事實不可能ナラン)此ノ  
點ハ如何セントスルモノナリヤト述ヘタル處陸軍武官ハ  
斯ル點ハ承知シ居ラス唯直ニ斡旋ヲ求メテ止マス時機遲  
ルレハ貴下ノ御爲ニナラサルヘシト云ヘルニ付本使ハ物  
ニハ順序アリ本使ノ立場トシテハ陸軍武官ノ依頼アリト  
モ現地ニ在ル海軍武官ヲ全然無視シテ輕卒ナル擧ニ出ス  
ルヲ得スト撥付ケ先ツ事態ヲ明確ニスル爲至急本省ニ電  
報シテ其ノ結果ヲ俟ツノ外ナキ旨諭シ置ケリ

往電第二四九號ハ右ノ事情ニテ請訓セル次第ニ有之素ヨ  
リ本使ニ於テハ何等海軍武官ヲ庇フ次第ニアラス又大矢  
大佐ノ來任ヲ阻ム意思無之此ノ點ハ全然白紙ナルニ付篤  
ト御承知置キアリタク唯當館附武官更迭ノ要アルニ於テ  
ハ今少シク手際良ク圓滿ニ行フコトヲ本使トシテハ特ニ  
此ノ際希望セサルヲ得ス

謀略横行ノ世ノ中ニテ本件竝ニ其ノ他ニ關シ爲ニスル誤  
傳中傷乃至ハ排斥等傳ヘラルルコトアリ得ヘキヲ以テ敢  
テ御耳ヲ汚ス次第ナリ

二、更ニ重大ナルハ本使ノ内密耳ニスル所ニ依レハ阿部中將  
ハ獨逸萬一ノ場合ニハ特別仕立ノ飛行機ニテ部下十數名  
ヲ伴ヒ獨逸ヲ脫出シ當國ニ無理ヤリニ這リ込ム計畫ヲ樹  
テ居レリトノコトニシテ之力爲其ノ腹心ノ大矢<sup>(箭)</sup>大佐ヲ先  
ツ當地武官ニ任命セルモノナルカ如ク本使ノ推測ニテハ  
此ノ計畫カ未然ニ漏ルルトキハ從來瑞西側ヲ刺戟セサル  
様極力努力シ居ル本使ノ反對ヲ受クヘキヲ惧レ今回ノコ  
トニ關シテハ一切本使ニ接觸シ來ラサルモノト思ハル陸  
軍武官ハ勿論之ニ參畫シ居ルカ如ク(海軍武官ハ之ニ反  
對シ居ルカ如シ右ニ依リ前掲一ノ事情ハ判明ス)噂ニ依

## 二 中立国を通じた和平打診

レハ彼等ハ當地ニ於ケル將來ノ和平接觸ヲモ見越シ入國成込ノ上ハ追々ト問題ヲ起シ公使館乗取リヲモ策シ居ルカ如シトノコトナリ四月六日ノ當地各新聞ハ阿部中將海軍武官トシテ當地ニ乘込ムヘシトノ記事ヲ掲ケ「センセイシヨン」ヲ起シ各方面ヨリ問合セアリ如斯事實ナント說明セシメ置キタルカ當館ニテ取調ヘタル所ニ依レハ右ハ「エイピ一」カ獨逸側ヨリ得タル情報□□□趣ナリ若シ萬一二モ前記ノ如キ無思慮ナル舉ヲ斷行スルニ於テハ當國ヲ刺戟スルハ勿論英米ニ好個ノ干渉ノ口實ヲ與フル結果トナルハ火ヲ睹ルヨリモ明カニシテ當國ニ於ケル本使等ノ使命遂行ニ重大障碍ヲ及ホシ活動ノ運命ヲ□ムルコトトナルヲ惧ル海軍中央ニ於テハ果シテ斯ノ如キコトヲ承認スル次第ナリヤ斯ル危險有害ナル企テハ之ヲ未然ニ阻止スル様海軍中央ヨリ至急嚴重ナル命令發出方ヲ本使ハ切望シテ煩マス

其ノ後ノ情報ニ依ルモ本件準備ハ着々進行シツツアル模様(大矢ハ既ニ「コペンハアゲン」ニ到着查證取付ケ)待チ居リ同行ノ三井社員浦田ハ十五日當地着陸海軍事務所ヲ歴訪シ居レリニテ事實ニ相違ナシト認ムルニ付テ

ハ事ノ重大ナルニ鑑ミ有ノ儘ヲ報告シ切ニ大至急御裁斷ヲ仰ク次第ナリ尙本件ニ付テハ折返シ何分ノ儀御回電ヲ請フ

~~~~~

951 昭和20年5月10日

在スウェーデン岡本公使より  
東鄉外務大臣宛(電報)

### スウェーデン政府による和平斡旋の意向に關しバッゲ公使への回答振りにつき請訓

ストックホルム 5月10日後発  
本 省 5月11日前着

第三三三二號(館長符號、緊急、極祕、必親展)

「バッゲ」公使歸朝セル旨ヲ以テ本十日本使ヲ來訪出發前昌谷公使ヲ通セラレタル件ニ付本使ニ内話シ東京ヨリ電報アリタルヤト尋ネタルニ付本使ハ何等電報ニ接シ居ラスト答ヘタル處貴大臣ノ御内意承知致度ト述ヘタリ

右ニテ思當ルハ四月十七日外務次官ト會談ノ際次官ハ日本トシテハ更ニ重大ナル問題ヲ控ヘ居ラル次第ニ付此ノ際米國英國ノ好マサル海軍武官室ノ增强ノ如キ小問題ヲ固執セラレサルコト然ルヘシト一言述ヘタルニ付本使ハ不思議

ナルコトヲ言フト直感シタルモ態ト其ノ儘聞流シ置キタルコトアリ勿論「バ」公使ヨリノ電報ニ依リ承知シ居リタルモノト推察セラル

ふまえ小野寺陸軍武官による和平工作中止措置方要請について

ストックホルム 5月17日後発  
本 省 5月18日前着

第三五〇號(極祕、館長符號、緊急、必親展)  
往電第三三三一號ニ關シ

右次官ノ口吻ヨリ察スルニ瑞典政府側トシテハ斡旋ノ意有ルモノト思ハルルモ同時ニ英米側ニ筒抜ケトナル危險大ナルモノアルヲ憂慮ス本曰「バ」公使ヨリ聽取リタル所ニ依レハ全然瑞典側ノ「イニシヤチブ」トシテ探ラシムル御内意ナラハ其ノ旨更ニ同公使ニ内示スルヲ要スト認ムルニ付

何分ノ儀至急御回電アリタシ  
尙申ス迄モ無ク本件ハ館員ニモ一切知ラシメス電報モ本使組ミ貴電ノ解讀モ本使自ラ爲スヘシ

編 注 在本邦バッゲスウェーデン公使は東京出立前に、スウェーデン政府を介した和平交渉に關し、重光外相、昌谷忠前フィンランド公使等と協議を行つてゐた。

昭和20年5月17日 在スウェーデン岡本公使より  
東郷外務大臣宛(電報)

スウェーデン外務省及びバッゲの注意喚起を

君ナル「カール」殿下ニ之ヲ通シタルヲ以テ同殿下ハ其ノ側近者ヲ外務省ニ遣ハシ之ヲ傳ヘシメラレタリ外務省ハ勿論全然之ヲ問題トセスカル横合ヨリノ策動ハ取合フヘカラストテ直ニ一蹴シタルカ外務省ニ於テハ斯クノミナラス其ノ遣方モ拙劣ニシテ之ヲ繼續セシムルトキハ本筋ノ交渉ノ邪魔ニナリ且極メテ危險ナリト申シ居レ

## 二 中立国を通じた和平打診

リ既ニ「エ」ノミナラス殿及ノ側近者ハ事實ヲ知リ

居リ何等ノハスミニテ洩ルルトモ限ラス自分ハ切ニ日本

ノ爲ヲ思ヒ御注意スル次第ナリ

二、次ニ「バ」公使ハ未タ本國ヨリ電報ナキヤト尋ネタルニ

付本使ハ何等電報ナント答ヘタル處兎ニ角至急東郷外相

ノ御内意ヲ知リ度暫ク俟ツコト致スヘシト述ヘタリ

本使ヨリ試ミニ「バ」公使ニ對シ當地ニテ英米側ト會談

セラレタリヤト質シタル處米國公使ノミニハ面會セルカ

自分ノ觀タル事實ヲ客觀的ニ述ヘタルニ過キス自分トン

テハ前後十年日本ニ在勤シ日本ノ友人トシテ御役ニ立チ

度シト存シ居ル次第ニシテ萬事最善ノ注意ヲ以テ行動シ

居ルニ依リ其ノ點ハ御安心アリテ然ルヘシト答ヘタリ

三、就テハ前記小野寺武官ノ件ハ陸軍中央ノ命ニ依ルモノナ

ルト否トニ拘ラススクノ如キ横合ヨリノ行動禁止方至急

中央ニ於テ内密且的確ニ御措置アリ度、此ノ際二重外交

ハ斷シテ不可ニシテ外務省トシテハ餘程曉リスルヲ要ス

ト痛感ス將又五月十日附拙電ニ對シテハ何分ノ儀至急御

回電アリタシ

953 昭和20年5月18日

東郷外務大臣より  
在スウェーデン岡本公使宛(電報)

### バッゲ工作につき暫時待機方指示について

本省 5月18日発

第二二〇號(館長符號、嚴祕)

貴電第三三三一號ニ關シ

前内閣時代ノコトヲ取調フル必要モアリテ稍々時日ヲ要ス  
ルニ付右ニ御承知置アリ度

954 昭和20年6月3日

在バチカン原田公使より  
東郷外務大臣宛(電報)

### バチカン司教より米国側との接觸につき提案

について

バチカン 6月3日前發

本省 6月5日前着

第五三號(館長符號、絕對極祕)

一、二十七日前駐米法王使節館參事官ニシテ目下國務省ニ在  
ル「ブアニヨツチ」司教ハ當館囑託富澤司祭ヲ來訪ノ上  
實ハ數ヶ月來羅馬ニ在ル一米人ヨリ和平問題ニ關シ日本

側ト接觸シタキニ付橋渡シヲ依頼シタシトノ申出アリ先方ノ身分氏名等ハ申上ケ得サルカ其ノ父親ハ社會的ニ相當有力ナル人士ナリ本人ハ加特力教徒ニシテ眞面目ナル人物ナルカ公ノ地位ヲ有スルモノニ非ス尤モ先方ハ愈交渉ノ段取リトナラハ公ノ人間ヲ以テ之ニ當ランムル用意アル旨述ヘ居タリト爲シ本件申出ノ事由トシテハ歐洲戰爭終結セルモ其ノ後ノ蘇聯ノ態度ニ依リ政局益々惡化ノ徵アリ翻テ極東ニ於テハ蘇聯ハ恐ラク戰爭ノ最後ノ段階ニ參戰シ満洲ヲ手中ニ入レ中國共產政府ヲ使嗾シテ其ノ地盤ヲ確保セントスヘシト察セラレ他方從來ノ戰績ヲ顧ミルモ米側ニ於テ今後必スヤ多大ノ犠牲ヲ要スヘク又日本側ニ取リテハ既ニ戰勝ノ見込無シト斷シ得ヘシト爲スニアリ又米側休戰條件トシテ差當リ付度シ得ルモノハ占領地ノ還附、陸海軍ノ武裝解除、朝鮮ノ占領等ニシテ國體問題ニハ觸レス又日本本土ノ占領ヲ考慮シ居ラスト思考セラルルト爲シ居タリト說明シ唯本件ハ對蘇關係上極メテ機微ナルヲ以テ此ノ點注意ノ要アリト附言シタル趣ナリ

本省 6月14日後3時00分着  
チユーリッヒ 6月11日後6時45分発

三、然ルニ條件内容ノ荒唐無稽ナルハ暫ク擋キ本件人物力果  
ついて  
対日和平の可能性等に関する米国側の観測に

955

昭和20年6月11日

在チユーリッヒ神田總領事より  
東郷外務大臣宛(電報)

シテ何者ナリヤ「ブ」ハ絕對ニ明言セサルノミナラス其ノ目的カ奈邊ニ在ルヤニ關シテモ種々疑ハシキ節アリ依テ本使トシテハ暫ク之ヲ其ノ儘ニ放置シ置キタル處「ブ」ヨリ何分ノ回答方督促シ來タリタル趣ナリシヲ以テ富澤ヲシテ「ブ」ニ對シ此ノ際日本側ニ和平促進ノ意嚮無シト信ス而モ公ノ立場ニ在ルモノカ何者ナルカ判ラサル人物トスル問題ヲ云々シ得サルハ言フヲ俟タス尤モ先方ノ言フ如ク公ノ背景ヲ有スルコト確認セラレ米側トシテ何等日本側ニ傳達ノ希望アルニ於テハ右ヲ考慮シ得ヘシ但シ若シ右カ所謂無條件降伏ノ懇惻ニ過キサルモノナラハ眞平ナリトノ趣旨ヲ以テ簡単ニ回答セシメ置キタリ右不取敢(六月二一日起草)

## 二 中立国を通じた和平打診

米側ノ發表ニ依レハ歐洲戰終了ニ依リ不要トナレル武器兵員ノ極東向大量輸送ハ着々實施セラレ居リ獨逸包圍軍總兵力ノ千五百萬乃至十三百萬ニ比シ精々六十五萬ヲ數ヘタル對日第一線攻擊兵力ハ今ヤ飛躍的ニ増強セラルヘク日本ノ兵力ハ四百萬ニシテ將來尙四百萬ヲ動員スル餘力アリ航空機月產一、五〇〇機ニシテ必ラスシモ侮リ難キ實力ヲ保有シ居リ之ニ對シテハ杉大ナル人力物力ヲ總動員シテ戰爭遂行ニ邁進スヘントシハ陸軍ノ一部ヲ復員スヘキモ一年内ニ七百萬ノ兵ヲ召集スル計畫ニシテ之ニ他ノ聯合軍ヲ加フレハ總兵力ハ對獨兵力量ヲ凌駕スヘント云ヒ或ハ一千萬以上トナル豫定ナリト報セラル空襲ニ付テハ對獨逸同様ノ作戰ニテ只距離ノ關係上從來ニ無キ超弩級大型爆擊機ヲ作製シ「マリアナ」基地ヨリ八頓、沖繩ヨリ一〇頓ノ爆彈ヲ積載シ一日一、二〇〇機ノ割合ニテ連續爆撃ヲ行フ時ハ獨逸ノ場合ヨリ短期間ニ所期ノ目的ヲ達シ得ヘント爲シ海軍ハ陸軍ノ如ク動員解除ヲ行フコトナク全兵力ヲ使用スル筈ナリト稱ス桑港會議列席者ノ印象ニ依レハ米國ハ殊ニ西部ニ於テ對日戰ニ熱意アリト云ヒ政府ハ獨逸降服ニテ意ヲ緩メ

ルコトナク日本擊滅ニ邁進スヘントノ宣傳ニ大童ニシテ英國ハ國內ノ政爭ニ拘ハラス保守黨勞働黨トモ舉ツテ米國ヲ助ケ他モ之ニ追隨シテ對日戰積極化ヲ呼號シ居レリ又「ルーズベルト」死去ニ際スル鈴木首相談及東京「ラジオ」放送ハ中立國ノミナラス敵側ニモ注意ヲ惹キタルカ次テ英米側ハ日本ノ和平打診ノ噂ヲ流布シ之ニ關シ日本内部ハ二派ニ分レ首相、重臣、財界カ妥協和平ヲ希望スルニ對

シ實力派殊ニ陸軍ハ内心ハ和平ヲ希望シツツモ責任回避ノ爲之ニ耳ヲ藉サス表面飽迄戰爭遂行ヲ主張シ居ル處一般ニ曰蘇關係惡化ニ依リ憂色濃厚ニシテ蘇ノ介入ニ先立チ英米ト手ヲ打タントスル意嚮カ勝ヲ制シタリトノ趣旨ノ註釋ヲ加フルト共ニ日本國民カ誤レル優越觀念ヲ捨テ軍部カ何等悔ヒ改メス益々跳梁スル現狀ニ於テハスル和平提案ニ到底應スルヲ得ストノ意味ヲ宣傳シ「トルーマン」ハ其ノ演說中米國ハ中途半端ノ和平ハ爲サス日本ノ無條件降服ヲ要求ス但シ右ハ日本ヲ滅亡セシメ奴隸化スルモノニ非ス軍閥ヲ除去シ日本ニ見込ナキ戰爭ヲ終結セシムル爲ナリ日本カ之ヲ聽カサレハ獨逸同様ノ運命ヲ辿ルノミト述ヘタリ而シテ米太平洋岸ノ對日放送ハ今後右方針ニ從ヒ宣傳スト謂ウ然

ル處最近米軍部當局及英國ノ一部(例へハ舊駐日大使「クレーギー」)ニハ日本國內動搖ノ徵候ナク自發的降服ハ期待シ得ス全國民ニ行渡ル軍國精神ヲ打破スル必要アリ戰爭ハ今後猶長期ニ亘ルヘシトテ對內的ニ警告スルモノアリト報セラル蘇聯カ旅大ノ失地回復ヲ欲スルノミナラス滿鮮ニ對スル野心アリトノ報道ハ米ニ不安ヲ與ヘタルモノノ如ク蘇聯參戰ハ戰爭終了ヲ促進スヘシトテ歡迎スル反面將來ノ紛爭ヲ回避スル爲對日戰ニハ蘇聯ヲ成ルヘク參加セシメス米英ノ力ニテ濟マセタシトノ意嚮相當強シト謂ハル

956

昭和20年6月11日

在スイス加瀬公使より  
東郷外務大臣宛電報

日本の対中立国政策及び和平問題に関するバッゲとの懇談について

ベルン 6月11日後8時00分発

本省 6月14日前8時00分着

第六六五號

八日「バッゲ」駐日瑞典公使本使ヲ來訪與謝野ヲ交ヘ懇談シタルカ同人談話中参考トナルヘキモノ左ノ通り

一、今般瑞西政府當局トモ會談ノ機會アリタルカ曰瑞關係力意外ニ悪化シ居ルニハ驚キタリ自分ハ當局者ニ對シ日本ノ事情等ヲ説明シ兩國關係ヲ悪化セシムルコトハ日瑞兩國ノ爲ニ何等益ナキコトヲ瑞西ト略々同様ノ立場ニアリタル瑞典公使トシテノ經驗ヨリ話シ置キタリ「ゴルジエ」公使カ「ナーヴアス」トナリ居ルコトハ自分モ承知シ居ル所ナルカ日本モ中立國ヲ大切ニ取扱ハルコト日本ノ友人トシテ希望ニ堪エス憲兵及警察官ノ態度ノ爲國交ヲ害スルカ如キコトハ全ク惜ムヘン  
二、日本ノ和平說種々流布セラル處米國人力無條件降伏ヲ唱ヘ居ル内ハ問題ニナラサルヘク況シヤ皇室ニ迄累ヲ及ホサンントスルヤノ言動ニ至リテハ全ク日本ヲ知ラサルモノト言フノ外ナシ尙最近ノ和平說ハ日本カ蘇聯ヲ通シ英米ト話合ヲ付ケントスルヤニ傳ヘラル處自分ハ之ヲ信セサルモ若シ日本側一部ニスル考アラハ些カ見當外レト言フノ他ナク和平ノ成立ヲ最希望セス日本ノ力盡キタル瞬間ニ甘キ汁ヲ吸ハントスルモノ之蘇聯ナリト考フ今次蘇聯内旅行ニ於テモ西方ヨリ東方ニ移動スル列車特ニ飛行機ノ數ニハ「インプレス」セラレタリ

三、中立國ノミナラス赤十字ノ取扱ニ付テモ日本側カ進テ之

ヲ利用スルノ態度ニ出テラレンコト希望ニ堪エス自分ハ「ジユノー」博士トモ懇談シタルカ同人ハ日本ノ爲ニモ決シテ不利ナラストノ印象ヲ受ケタリ云々

(因ニ同公使ハ佛國內ニ在ル財産整理ノ爲巴里ニ飛來シ當國ニモ立寄リタル旨語リ居タルカ瑞西政府及赤十字側ノ依頼ヲ受ケ事情説明ニ當國ヲ訪問セルモノト察セラレタリ)

957 昭和20年6月12日 在バチカン原田公使より 東郷外務大臣宛(電報)

バチカンを通じた接觸提案に対する日本側回  
答への米国側反応について

バチカン 6月12日後発  
本省 6月14日前着

第五九號(館長符號、絕對極祕)

往電第五三號ニ關シ

八日「ブアニヨツチ」司教再ヒ館員ヲ來訪ノ上當方ノ回答ハ其ノ儘先方ニ通シ置ケルカ先方ハ更ニ右ニ對シ(+)自分ノ

企圖セル所ハ米側ノ公ノ地位ニ在ル者ト日本トヲ全然非公式且極祕裡ニ會談セシメ何レノ「イニシアチブ」トモ無ク兩者ノ接近ヲ圖ラントシタルモノナリ(+)自分トシテハ米側ノ公ノ地位ニ在ル者カ此ノ際進シテ政府ノ名ニ於テ或ハ政

府筋ノ意嚮トシテ何等日本政府ニ傳達ヲ希望スルコトアリトハ考ヘラレス(+)將來日本側ヨリ何等米側ニ傳達方希望アレハ自分ハ何時ニテモ連絡ノ勞ヲ執ル用意アリトノ趣旨ヲ

當方ニ傳達スル様依頼セリト述へ尙先方ハ米側ノ主張スル無條件降伏ノ建前ハ今更變更スルコト仲々困難ナルヘキモ夫レハ如何様ニモ解釋シ得ヘント洩シ居タル由語リタル趣ナルカ右ハ要スルニ當方回答ニ對スル先方ノ辯明ニ過キスト認メラル何等御参考迄

958 昭和20年6月18日 在スウェーデン岡本公使より 東郷外務大臣宛(電報)

小野寺陸軍武官の和平工作に関する報告及び

対処方策につき請訓

ストックホルム 6月18日後発  
本省 6月19日前着

第四二六號（極祕、館長符號、緊急、必親展）

一、往電第四二五號當地ニ於ケル日本公使館ノ英米公使館ニ對スル和平接觸トハ言フ迄モナク五月十七日發電ノ館長符號電（往電第三五〇號）ニテ報告ノ當地ニ於ケル小野寺陸軍武官ノ策動ヲ指スモノト思ハル、同武官ハ「エリクソン」（其ノ人物ニ付テハ往電第四〇四號參照）ノ外ニモ外人ヲ使用シ又在當地日本人ノ一ヲモ使用シ居ルニアラスヤト疑ハル節アリ右往電第三五〇號ニ關シテハ何等ノ御回電ニ接セサル處本使ノ見ル所ニテハ同人ハ此ノ重要時機ニ外務省ヲ出シ拔キ手柄セントスルモノニシテ其ノ遣方ニ無理アル爲既ニ少シツツ馬脚ヲ現ハシ居ルモノナリ本使トシテハ政府カ斯クノ如キ陸軍ノ策動ヲ如何ニ取扱ハルルヤ何分ノ儀御回電ヲ希望スル次第ナリ

二、尙今回當地新聞ノ素破拔キニ對シテハ前記ノ事實アル限リ當館ヨリ特ニ打消シヲ發表セス其ノ儘默殺スルコト然ルヘシト思考スル處右ニテ宜シキヤ至急御回電アリタシニ、此ノ際御参考迄ニ當地ニ於ケル實情ヲ忌憚ナク報告スレハ陸軍武官ハ功名心競争心強キ策動家ニシテ目下既ニ日本人社會ノ攬亂分子ト思ハル從來種々謀略ヲ以テ本使及

公使館ヲ「ディスクレジト」セントシ例へハ當館暗號力盜マレ居レリト時々宣傳スルハ此ノ目的ノ爲ニスル彼等一流ノ謀略ナリト本使ハ睨ミ居リ一度ハ瞞サレタルモ二度トハ容易ニ其ノ手ニ乘ラス又神田參事官夫妻トハ特ニ親密ニ相通シ居リタルカ昨年夏小野寺カ伯林ニ赴キ大島大使ニ本使ヲ排斥シ神田ヲ後釜トセント運動セリトノ噂ノ眞相ニ付テハ河原參事官ニ御聽キ訊シアリ度シ更ニ四月十六日發電館長符號電（往電第二五一號）所載ノ陸海軍通謀ノ當館乗取ノ陰謀ノ如キモ決シテ架空ノ想像ニアラス大体事實ニシテ彼等ハ種々畫策シ居リ

最近小野寺ト通謀シ居ル海軍輔佐官ノ手記中ニ五月九日ノ分ニ

一、小野寺少將ヨリ

(イ) 最モ重要時機ニハ阿部中將ヲ海軍ノ最高官トシテ（部内限り）仰クコト

(ロ) 部内限り在瑞典海軍武官ヲ扇大佐トスルコト等ヲ以テ意見開陳アリ小官現地へ出張連絡ノ際阿部中將宛小野寺少將書信ヲ托セリ

二、將來起ルコトアルヘキ在當國日本機關ノ活躍ノ際ハ罔

## 二 中立国を通じた和平打診

本公司使ヲ當テトセス阿部中將扇大佐ト十分協議協力ス

ル件ニ關シ相互意見開陳アリト明瞭ニ記載シアルヲ偶然當館々員力確實ニ確メタル事實アリ

斯クノ如キ人物ヲ館附武官トシテ有スルハ何等本使ノ輔ケトナラサルノミナラス却テ危險ナルニ付平時ナラハ本使ヨリ斷然<sup>(更)</sup>交迭方ヲ稟請スヘキ所ナリ本使トシテハ日常舉措疚シキ所ナク又責ヨリ彼等ノ策動ヲ何等恐レス問題トシ居ラサル所ナルカ今後ノコトモアルニ付爲念申進ス

昭和20年6月28日  
在チユーリッヒ神田總領事より  
東郷外務大臣宛電報

日本戰の見通しに関する當地新聞記者の観測

について

チユーリッヒ 6月28日後2時57分発  
本 省 6月29日後9時50分着

第四三號

一、本官カ「チユーリッヒ」新聞記者ト接觸ノ際同人等カ當地新聞界一般ノ見解ナリトシテ語ル所ヲ綜合スルニ左ノ

如シ

何レノ交戦國ニ於テモ政府ハ一定ノ政治勢力ヲ背景トシテ立チ國內ニハ必ス反対派存在シ戰時中内閣更迭ノ場合其ノ原因ハ必ス戰爭政策ニ關係アリ日本ニ於ケル積極的指導勢力ハ陸軍ニアリトノ見方ヲ前提トシ日本ノ政治的

活動キヲ觀察シ居リ現内閣ハ鈴木首相ノ經歷ト閣員ノ顔觸ヨリ推シ妥協和平ノ機會ヲ狙フ弱キ性格ノ政府ナリト解シタリ

「ルーズベルト」死去ノ際獨逸ハ「ル」ヲ罵倒シ聞ク者ヲシテ鬱蹙セシメタルニ反シ東京「ラヂオ」ハ死人ニ鞭打タス弔意ヲ表シタル爲中立國ノミナラス英米側ニモ好感ヲ與ヘタルカ同時ニ日本ニ和平ノ動キアリトノ感ヲ與ヘタリ

次テ英米側ヨリ日本實業家カ和平打診ヲ試ミタリトノ噂流布セラルルヤ前記ノ如キ見方ニ基キ右風説ハ一應根據アリト解シタリ

日本側ハ右風説ヲ否定シ其ノ後政府ハ最後迄戦ヒ抜クノ決定ヲ屢々聲明セルカ同盟「ニユース」等ニハ詳細ノ説明ナキ爲一般ニ右聲明ハ豫想シ居ル鈴木内閣ノ性格ト矛

盾スルノ感ヲ抱キ種々臆測ヲ加ヘ或ル者ハ政府ハ内心和平ノ機會ヲ摑マントスルニ變リナキモ宣傳ノ爲表面上強氣ヲ示シ居レリトシ或ル者ハ日本ハ出來ル丈長ク抗戰ヲ續ケ米國カ戰爭ニ疲勞ヲ覺ユル時期ヲ俟タントシ居レリト解シ又或ル者ハ政府及和平派ハ再ヒ積極派ノ勢力ニ押ヘラレ始メタリト推測シ居レリ

歐米流ノ常識ヨリセハ抵抗力ヲ喪失セル部隊カ降伏シ捕虜トナルハ恥ニアラシテ當然ノコトナルト同様戰爭末期ノ「ナチ」政權ノ焦土戰術ハ全ク無意味ナリ歐米人ハ戰爭ニ於テモ國民ノ將來ヲ考慮シ人的物的ノ無意味ナル損害ヲ回避スルコトハ政治家ノ任務ナリトサヘ考ヘ居リ「ナチ」政權ハ敗戦ト共ニ沒落スルノ運命ニアリタル爲自己ノ生存欲ヨリ國民ヲ道連トシ不必要ナル犠牲ヲ拂ハシメドン底ニ陷レタリトシ「ナチ」ノ恐ルヘキヲ痛憤スルト共ニ憎惡心ヲ増シ之ニ引摺ラレタル國民ニ對シテモ「ナチ」ト同罪視スル者アルモ其ノ勇敢サヲ稱讚スル者ナシ

米國ハ對獨戰ニ於テ英國以上ノ經費ト人命ノ犠牲ヲ厭ハサリシハ萬一英國ノ敗レタル場合日獨ノ脅威ヲ感シタル

爲ニシテ歐洲ニ對スル野心ニ基クト觀ルハ誤ニシテ現ニ米國ハ歐洲ニ於テ左程大ナル政治的經濟的欲望ヲ有シ居ラス日本ニ對シテハ獨逸ノ場合ト異ナリ直接ノ脅威ヲ感シ居ル爲其ノ戰爭決意極メテ鞏固ニシテ對日戰ノ容易ナラサルコトヲ承知シ長期ニ亘ルコトアルヲ豫想シテ構ヘナシ居ルヲ以テ戰爭ニ飽クコトアリトハ考ヘラレス物力ニ依リテ勝敗ヲ決セントスル米國ハ必勝ノ信念ヲ以テセハ必ス勝ツトノ精神論ハ對内宣傳ニ過キストシテ意ニ介セス特攻隊戰術ニ對シテモ戰局ニ及ホス效力ノミヲ見テ價值判斷ヲナシ陸海空ノ武力及其ノ基礎ヲ破壊スルコトニ依リ戰爭ハ自ラ終結スルモノト考ヘ居リ日本國民ノ志氣旺盛ナリトスルモ武裝セサル一般國民抵抗ノ結果戰爭カ無勝負ノ形ニテ無限ニ繼續スルコトアリトハ想像シ居ラス歐米人ノ常識及戰爭觀ヲ以テセハ焦土戰術ヲ敢テセル獨逸ニ於テ裝備ノ粗雜ナル「フオルクスシユトルム」ハ戰意ヲ缺キ一般住民カ蘇軍ニ對シテハ勿論英米軍ニ對シテモ抵抗セス到ル處戸外ニ白旗ヲ掲ケテ英米軍ヲ迎ヘ「ワエヤヴォルフ」モ名ノミニテ活動ノ形跡無カリシハ不思議ニアラス之ニ反シ米軍カ日本本土上陸ヲ試ミル場

## 二 中立国を通じた和平打診

合一般住民カ軍隊ト同様死ヲ顧ミス抵抗スルコトアリト  
セハ捕虜トナルヨリ死ヲ選フ日本兵ノ心理カ理解ニ困難  
ナル以上ニ不可解ナリ

率直ニ言ヘハ當國人一般ニ戰爭ハ長期ニ亘ルトスルモ結  
局ニ於テ日本ニ勝味ナント觀測シ居リ日本ノ政治指導者  
及國民ノ心中ニハ獨逸ノ實例ト日本ノ都市爆撃ノ經驗ニ  
鑑ミ無意味ナル人的物的損害ヲ避ケントノ考アリト想像  
シ他方米國ハ無條件降伏ヲ主張シ居ルモ獨逸ノ場合ハ  
「ナチ」政權自體ノ壞滅ヲ目的トシタル爲當ノ「ナチ」  
政府トノ妥協和平ハ不可能ナリシカ日本ニ對スル態度ハ  
之ト同シカラス又支那問題對蘇關係等ニ於テ獨逸トハ事  
情ヲ異ニスルヲ以テ必シモ右要求ヲ固執ストハ限ラス  
其ノ間自ラ妥協和平ノ可能性アリト解シ居レリ

三、之ニ對シ本官ハ政府ノ更迭ハ必シモ戰爭政策ノ變更ヲ  
意味セス軍部カ戰爭政策ノ積極的指導勢力ナリトノ見方  
ハ根本的誤謬ニシテ戰爭遂行ニハ上下一致シ居リ殊ニ全  
國民ノ戰意極メテ強烈ニシテ反對派ナルモノ存在セス故  
ニ一切ノ和平打診ノ噂ハ事實無根ナリ無條件降伏要求ハ  
自衛上已ムヲ得サル戰爭ナリトノ深キ信念ヲ有スル國民

ノ正義感ヲ傷ケ日本ヲ罪人扱ニスルモノナリトノ憤激ヲ  
招クノミナリ戰爭ノ意義ヲ自覺スル國民ハ當初ヨリ生命  
ヲ捨テ掛リ居ルヲ以テ都市ノ壞滅其ノ他物質的損害將  
來ノ生活問題ノ如キ念頭ニナク日本國民ノ壞滅ヲ目的ト  
セストカ獨逸ノ二ノ舞ヲ演スヘントカノ英米ノ宣傳ハ日  
本人ノ胸ニハ何等響カストノ趣旨ヲ説明シ英米流ノ考ヘ  
方ヨリセハ了解困難ノ點鮮カラスト思ハルモ記事論說  
取扱ノ際右ヲ事實トシテ受取り觀察センコトヲ希望スル  
旨述ヘタル處記者連ハ同盟「ニュース」ハ簡單ニシテ事  
情ノ判斷困難ナルニ付當國人等ノ疑問トスル點ニ付詳細  
ナル「コメント」ヲ附シタル報道ヲ入手シ得レハ幸ナリ  
ト語リ居レリ

ルハ面白カラサルカ今後共、善導ニ努ムル所存ナリ

ニ依リ本人ニ嚴重注意方早速訓令スヘキ旨答ヘタリ右貴使  
限リノ含ミ迄

960

昭和20年6月30日

東郷外務大臣より  
在スウェーデン岡本公使宛(電報)

小野寺陸軍武官による和平工作等に關し東郷

外相より陸海軍側に対し注意喚起について

本省 6月30日後4時30分発

第一五二號(館長符號、親展)

貴電第三五〇號ニ關シ

當時出先公館ニ於ケル和平策動説ヲ敵側ニ於テ流布シ且冒

頭電接到ノ次第アリタルニ依リ本大臣ヨリ陸海軍大臣、參

謀總長及軍令部總長ノ注意ヲ喚起シ出先機關カ和平工作メ

キタル行動ヲ爲スコトノ不可ナル所以ヲ説キタルニ對シ兩

軍首腦部モ同意見ニシテ夫々出先機關ニ必要ナル訓令ヲ發

スルコトニ打合セ本大臣ヨリハ往電台第五〇一號ノ通訓令

シタル次第ナリ然ルニ貴電第四二六號ノ次第アリタルヲ以

テ更ニ參謀總長ニ注意シ斯カルコトカ續行セラルニ於テ

ハ右武官ノ召喚ヲモ求メサルヲ得サルニ至ルヘキ旨述ヘタ

ル處總長ハ過般モ訓令シ置キタル次第ナルカ右ハ初耳ナル

961

昭和20年7月9日

在スイス加瀬公使より  
東郷外務大臣宛(電報)

朝日新聞駐在員による時局情勢報告及び和平

交渉開始方提言について

ベルン 7月9日後2時43分発  
本省 7月11日前8時00分着

第七五九號(館長符號扱)

緒方内閣問(編注)

朝日歐洲駐在員笠信太郎ヨリ過般下村總裁ニ申上ケタル一般情勢報告ニ續ク結論トシテノ所見左ノ如シ

一、蘇聯邦ノ態度

前電ノ結語ニ述ヘタル如ク蘇聯邦ハ英米態度ノ變化ヲ早

ク見テトリ逆ニ東亞戰參加ノ權利ヲ獲得セントノ態度ヲ

進メツツアルコト疑フ餘地ナシ蘇聯邦トシテハ現在ノ段階ニ於テハ日本ヲ壓迫スルコト自體ヲ直接ノ目標トスル

ニアラサルモ之ニ大ナル關心ヲ持ツ所以ハ日本ノ後退ヲ

## 二 中立国を通じた和平打診

前提トシテ且之ヲ機會トシテ戰後東亞ニ於ケル英米勢力ニ對抗スルニ充分ノ地盤ヲ此ノ際作り上クルコトヲ其ノ最大ノ政策目標トスルカ爲ナルコト明瞭ナリ唯此ノ目的ヲ貫徹シ得ル限リニ於テ蘇聯邦ハ我方ニ對シ和戰兩様ノ構ヘヲ執リ未タ其ノ何レナリトモ明確ニハ表示セサルモノレニシテモ此ノ意圖ハ今回ノ東亞戰ヲ機トシテ飽迄貫徹セント試ミントスルコト自明ト見サルヲ得ス  
斯ル蘇聯邦ノ態度カ表面化シ來リタルハ前ニ述ヘタル英米ノ對蘇態度ノ變化モ時ヲ同クシテ昨年ノ夏頃ニ始マル其ノ證左ハ歷然トシテ昨年六月以來引續ク蘇聯邦人ノ日本攻擊ニ表現セラレ十一月七日ノ「スター・リン」演説ヲ以テ烙印ヲ捺シタル形ナリ而シテ右ハ先般ノ中立條約不延期ノ通告トナルヘキ前觸レタリシモノナルカ此ノ蘇聯ノ對日態度ハ蘇聯カ同シク條約不延期ヲ通告シ現ニ其ノ條約改訂交渉ニ於テ之ヲ強壓シツツアル土耳其ニ對スル態度等トハ大イニ質ヲ異ニシ其ノ對日通告ノ理由書ハ其ノ儘何時ニテモ對日斷交乃至宣戰ノ理由トナリ得ヘキ程モノナルコト茲ニ言フヲ待タス從テ從來ノ蘇聯政策ノ一般的ナ出方ト昨年六月以来一貫シテ表明シ來タレル對

日態度トニ徵シ特ニ蘇聯トシテハ英米カ蘇聯ノ東亞進出ヲ希望セサル態度ニ逆行シテ先手ヲ打タントスル立場ニ在ル點更ニ又日本ノ現内閣カ前内閣ト異リ少クトモ其ノ成立當初明白ニ一個ノ雰圍氣ヲ持ツモノト歐洲一般ニ解釋サレ居タル點ヲ見ルトキ蘇聯トシテハ時期ヲ失スルコト無ク東亞政策ニ一步ヲ進メ置カントスルモノト考ヘテ誤リ無カルヘシ其ノ對策ハ既ニ對日斷交ノ措置ノ如キテハ間ニ合ハサル段階ニ達セリト思ハル一般ニ言ヘハ歐洲戰終局ヲ告ケタル今日直接ニ對日宣戰ノ舉ニ出ル可能性ハ頗ル多シト考ヘサルヲ得ス成ル程蘇聯カ蘇滿國境ニ充分ノ準備ヲナス迄ニハ歐洲戰ノ經驗ヨリ見テ半ヶ年ハ要スルモノト考ヘラルモ場合ニ依リテハ當初ハ西比利亞奥地ニ退クコトモ覺悟シ兔モ角紙ノ上ニテ宣戰シ以テ和平ニ際シテノ絶大ノ發言權ヲ確保シ置クコトハ蘇聯トシテ算盤ニ合ハサルコトニアラス唯此ノ時期ヲ確言スルハ困難ナルモ蘇聯カ日米英和平ノ機運釀成シ始メタリト見ルニ於テハ此ノ實現性ハ頓ニ加ハルヘク之トハ逆ニ蘇聯ニシテ我方カ米軍ノ上陸ヲ控ヘ之ト決戰スルノ決意固シト見ルニ於テハ對日宣戰ハ之ニ應シテ引延シ自ラ別個ノ

方法ニ出スルモノト考ヘラル最近ノ一、二ヶ月蘇聯ノ此

### 三、米英ノ態度

ノ問題ニ關スル發言ハ刺戟的ナルモノ少ナク特ニ桑港會議ノ中途以來寧ロ宣戰セシテ宣戰シタルト同様ノ效果ノミヲ狙ヘルカ如キ調子ヲ示セリ但シ之ヲ以テ蘇聯ノ我方ニ對スル態度緩和セリト考フルハ大ナル誤リナルヘン戰永引クト見レハ宣戰布告ハ最後迄引伸スコトアリ得ヘク唯其ノ以前ニ我方ニ向ツテ樺太、滿洲、朝鮮等ニ關スル最後通牒的要求ヲ提出シ來ル可能性ハ充分ニ考ヘラル即チ蘇聯トシテハ戰ハサル場合モ戰フト同様ノ效果ヲ獲得シ得ルノ確信ナケレハ宣戰布告ナシニハ濟スコトアラサルヘシ不肖ハ近ク開催サルヘキ三國會談ノ直前ニ當リテ例ニ依リ「既成事實」ヲ作り上ケ置ク爲ニハ我方ニ對シ何等カノ要求提出等ノコトナキヤト憂慮セシ次第ナルカ我方ニアラシテ土耳其ニ對シテ此ノ手ヲ用ヒタル所ヲ見レハ對日方策トシテハ更ニ別個ノ行方ヲ考ヘツツアルモノト推斷セシメラルル次第ナリ而シテ此ノ新事態ノ前例トナリツツアルモノハ米ノ對日上陸戰ノ氣構ト之ニ對應スル米ノ對蘇政策ノ變化ナリト考ヘラル之最近ノ發展ニシテ更ニ後段述フル所ノ如シ

來リタル所ナルカ故ニ米英トシテハ蘇聯ノ東亞進出以前ニ我方ト和ヲ講スルノ有利ナルコトハ夙ニ承知ノ筈ニシテ此ノ傾向ハ我鈴木内閣出現以來最近迄ノ米國ニ於テ特ニ顯著ニ表面化シ來レリ從テ此ノ米英ト蘇聯トノ日本ニ對スル政策ノ喰違ハ最近ノ一、二ヶ月ニ於テ最モ大ナリシ次第ナルカ此ノ機ハ過去一、二週間ヲ境トシテ刻々去ラントスルカノ觀深シ蓋シ米ハ最近ノ段階ニ於テ特ニ桑港ニ於ケル蘇聯ノ壓迫的空氣ヲ通シ蘇聯ノ東亞進出ノ意圖ノ既ニ如何トモ致シ難キヲ知リタリルト同時ニ一方日本本土上陸ノ課題ヲ日ノ前ニ浮ヘテ見ル時其ノ敢行ニ際シテ關東軍ノ内地移送ヲ恐レ之ヲ蘇滿國境ニ牽制スルコトノ必要ヲ感セサルヲ得サルヲ以テ此處ニ米トシテハ從來抱懷シ來リタル蘇聯ノ東亞進出ニ對スル一方的ナル毛嫌ノミニテハ押通シ得サル事態ニ直面シタリト見サルヲ得ス此處ニ新シキ眞ノ契機アリ乍併米カ蘇聯ノ對日宣戰ニ依ル行動開始ヲ好マサルコトハ依然タルヘキカ故ニ米ハ之ヲ政治的ニ解決シ蘇聯ノ東亞進出ノ限度ヲ決定シテ

## 二 中立国を通じた和平打診

懸ラントスル態度ニ出スヘシト見ルヲ以テ目下ノ事態ニ近キモノトスヘシ「ホプキンス」ノ莫斯科交渉ニ於テ蘇聯ハ少クトモ表面上歐洲問題ニ付テハ可成リニ讓歩ノ姿勢ヲ示セリ蘇聯トシテハ此ノ代償ノ意味ニ於テ米トシテモ其ノ立場ヨリ註文ヲ持ツ所ヨリシテ當時極東問題ノ根幹ニ觸レシニアラスヤト考ヘルハ常識ナルヘシ然ラハ獨逸處理ト云フ頗ル發展性アルト同時ニ御互ニ根本的ニハ觸レ難キ重大課題多キトハ既ニ話題ノ少ナカルヘキ三國會談ニ於テ對日問題ノ取上ケラレル機ハ熟セリ蘇聯ヨリ之ヲ持出ス可能性アリトスレハ米英側ニ之ニ對スル用意ナシトハ見ルヲ得サルヘシ但シ取極ハ必スヤ曲折アルヘク蘇聯トシテハ簡単ニ決定的ナル輪廓ヲ作ラセスト見ルヲ至當トスヘク曾テノ獨逸問題ヲ繞ル「ヤルタ」會議ノ取極カ問題コソ異ルカ好ク此ノ典型ヲ示セリ要スルニ蘇聯トシテハ歐洲戰ニ於ケルト同様ノ條件ヲ和戰何レカラ通シテ東亞ニ於テ展開セントスルハ明カニシテ英米ハ歐洲戰ノ苦キ經驗ヲ戰後ノ現在ニ於テモ猶嘗メツツアルニ拘ラス遂ニ蘇聯ニ押詰メラレ同シ條件ニ依リ取組ヲ爲スノ已ムナキ事態ニ近ツキツツアリ從テ米英トシテハ早ク

我方ト和シテ戰局ヲ結フカ然ラスンハ蘇聯トノ間ニ政治的解決ヲ以テ極東勢力圈ヲ分割シ蘇聯ノ果シナキ進出ヲ一應抑ヘ置キテ對日戰ヲ繼續スルカノ外ナキ事態ナリ、サリ乍ラ前述ノ如ク蘇聯カ英米ヲシテ全ク安心セシメル種ノ約束ヲ爲スヤ否ヤハ又疑問ニシテ從來ノ蘇聯ノ遣口ヨリ見レハ當面米ヲシテ全力ヲ舉ケテ對日戰ヲ續行スル様仕向ルト同時ニ他方蘇聯ノ支那進出ノ最後ノ手ハ自由ニ殘シ置クニ相違ナキニ付米トシテ何處迄モ對日戰ニ打込ムニ付テハ依然トシテ自信ハ捨テス不安ハ殘ルヘシ故ニ假令來ルヘキ三國會談ニ於テ一應ノ話ハツクニシテモ其ハ一應ノモノニ過キス米英殊ニ英トシテハ出來得ル限り對日戰ノ局ヲ結フニアラサレハ其ノ對日戰ノ算盤ニナル狂ヒヲ來ス可能性常ニ存在スルコトハ正ニ目前ノ歐洲ノ狀況ニ於テ彼等ノ身ニ泌ミテ實行セル所ナリサレハ米ハ依然トシテ我ニ向ヒ「無條件降伏」云々ヲ口ニセルモ彼カ此ノ取引ヲ急ケルハ明カナリ從テ無條件降伏トハ固ヨリ「言ヒ值」ニ過キス値引ヲ用意セルモノト推定シテ誤リナカルヘシト斷ス去ル五月九日ノ「トルーマン」ノ對日聲明以來ノ米ノ放送ハ此ノ間ノ消息ヲ暗示セリ昨

今當地銀行家ノ語ル處ニ依レハ彼等ノ交際セル米英外交官筋ハ内々和平ヲ希望セルコト明カニ看取サルトコハ單ナル街頭ノ氣分ニ過キサルモ獨逸ニ對シテハ曾テ見ルコトヲ得サリシ現象ニシテ茲ニ大獨逸ノ場合トハ著シキ相違アルヲ見遁スヘカラス但シ事態ノ推移スルニツケテ日本ヲ獨逸ト同視セントスル傾向ハ強マリツツアルカノ觀ハアリ蓋シ彼等ノ宣傳力彼等自ラヲ縛スル結果ナリサリ乍ラ當地ニ於ケル全體ノ印象トシテ話合ヲ以テスル和平カ暗示サレ居ルコト且ツ先方トシテ急キ居ルノ感被ヒ難キモノアリ「トルーマン」竝「クレーギー」等カ過般來頓ニ日本ノ戰力ノ强大ヲ強調シ且ツ之ヲ克服スルニハ大努力ヲ要ストノ意味ヲ高調シ來レルハ少クモ一面ニ於テハ對日和議ヲ比較的輕キ條件ヲ以テ行フ場合ヲ考慮シ國民ニ對スル豫防線ヲ張レルモノト解釋スルハ果シテ行過ぎナリヤ Truman 過般ノ對日發言中ニ「無條件」ノ文字ヲ用ヒサリシモ注目ニ值スヘシ又三日華府「ユーピー」電ニアル上院議員 Cavehart ノ言ノ如キ和平條件ニ關スル米國內ノ空氣ヲ反映スルモノト見ラルヘシ  
サリ乍ラ他方米トシテモ對日決定戰ノ爲ノ大規模ノ準備

ニカカリ居ルヲ以テ本土上陸戰ヲ開始スル迄ニ至レハ彼等トシテモ最早簡單ニハ後ニ退ケス對日和平ノ條件モ愈々不可能ヲ強フルカ如キモノヲ持出ササルヲ得サルコト必然ナリ右ハ蘇聯ト米英トノ間ニ話合成立スル場合乃至ハ蘇聯カ我方ニ要求提出ノ舉ニ出ツル場合、斯クシテ米自身力單獨ニ和議ノ鍵ヲ握リ得サルニ至ル場合モ同様ナルヘシサレハ第一ノ時機ハ來ルヘキ三國會談迄ニシテ第二ノ時機ハ本土上陸戰開始迄ト見ルヘク之ヲ過シテハ此ノ最後ノ機會ハ遂ニ永久ニ去ルニ非ルカヲ惧ルル次第ナリ此ノ機會トシテハ歐洲問題ヲ巡ツテ蘇聯ニ對スル英米ノ感情最モ惡化シ其ノ波ノ絶頂ニ在ルカノ感アリシ一ヶ月前ニ較フレハ今ハ既ニ最モ有利ノ時期ヲ逸セルカノ思アルモ此ノ英米蘇ノ對立關係ハ漫性ニシテ時ニ潮ノ満盈ハアレ共根底ニ於ケル對立關係ハ大體變化セサルヘシ固ヨリ極端ナル惡化ハ期待シ得ス寧ロ現在ヲ以テ底ト考ヘテ可ナルヘク三國會談後ハ寧ロ一時的ナル關係ノ好調子ノ時期ヲ期待セサルヘカラス  
他方英國內ノ情勢ニ於テハ「チャーチル」ハ歐洲問題ニ對スル苦境ト總選舉トヲ前ニシテ若シ對日問題ヲ解決シ

得ルコトモ有ランカ彼トシテハ内政上大ナル局面ノ轉換

トナルヲ以テ之ヲ希望スルハ明白ナルヘシ對日問題ニ就キ最近英ノ發言頗ル少キハ對獨逸ノ場合ト比較シ驚クヘキ關心ノ相異ヲ呈示セリ此ノ場合ト條件ハ我ニ有利ニシテ選舉後ニ於テハ假令「チャーチル」内閣安定スルニ於テモ何レニシロ英モ亦遙カニ硬化スヘシト觀測サル

### 三、我方ノ對策

我方トシテモ此ノ機ヲ逸シテハ戰ハ遂ニ止マル處ヲ知ラサルヘク其ノ間蘇聯ニシテ歐洲戰ニ用ヒタル大戰力ヲ東亞ニ移スニ到ランカ事態ハ最早收拾ニ難カルヘシ不吉ノ言ヲ好マサレトモ現在ノ獨逸ノ如キ方向ニ趨ルノ外無キニアラサルヤヲ眞ニ惧ルル次第ナリ獨逸ハ單ナル敗北ニアラスシテ敗北シ過キタルモノナリ今ヤ自國民ニ何等ノ「イニシアチーブ」無ク啻ニ國土財產ノミナラス國民ヲモ舉ケテ他國ニ散脱セシメタリト言フモ過言ナラス生キ殘リタル國民ノ經濟的苦難ハ相當期間ニ亘リ事實上他國ノ奴隸ニ近カルヘシ「ナチ」指導者等カ最後迄己レノ生命ノミニ執着セシハ鄉土ト國民ヲ顧ミサル慘忍性ト國際情勢ヲ達觀セサル無謀トハ遂ニ事ヲ此處ニ到ラシメタリ

素ヨリ帝國ノ前途ト同日ニ語ルヘキ問題ニアラス

去リ乍ラ事態ハ今ヤ寸刻ヲ爭フニ到レリ敵ハ壓倒的ナル物量ヲ賴ミ更ニ我ニ不利ナル國際情勢ヲ固メテ以テ抑シ來レリ此ノニ大條件ハ到底動カシ難シ本土上陸戰ハ敵トシテモ重大損害ヲ被ルハ自明ナレトモ歐洲戰ノ經驗ヨリスレハ其ノ絶大ナル爆撃ノ力ハ決シテ上陸ヲ不可能ナラシメス其ハ物理的問題ナリ一旦上陸ニ成功センカ悲壯ナル戰ハ文字通り婦女子ノ最後ノ一人ニ及ハシ國民ハ擧げテ此ニ死スルハ若若ナレトモ誰カ我カ意圖ヲ後世ニ繼カシ今ヤ戰ヒヲ繼クルハ易ク矛ヲ收メルハ難シ若シ一人ノ眞ノ名將アラハ矛ヲ捨テ敢然大君ト國民トヲ守ラン刻下ノ國難ヲ元寇ト比較スルハ甚々當ラス國難ハ此ニ百倍スト言フモ過言ナラサルヘク從テ良ク禪僧ノ一喝ヲ以テ當リ得ル事態ニアラス眞ニ勢ノ趨ク所ナリ遺憾極マレトモ今小ナル執着ヲ捨テ忍苦百年ノ覺悟ニ生キ國ノ根幹ト國民トヲ守ラサレハ遂ニ何物ヲモ喪フ日到ラサルナキヤ眞ニ憂慮ニ堪ヘス吾人ハ國家ノ存立ニハ如何ナル形ニ於テカ必ス軍力ノ存在ヲ必然トシ國家存在スレハ必ス軍力ハ自ラ生シ來タルモノト信ス唯國家關係ト

國內政治ノ變化トニ應シ變リタル姿ニテ生シ來ラン之ヲ期シテ始メテ今日ノ米ノ不遜ト殘虐ニ相見ユルコトヲ得ヘシ但シ其ノ爲ニハ國家ノ精神的獨立性ト經濟力ヲ持ツ國民ノ健在トヲ前提トセサルヲ得斯假ニ獨逸ノ現狀ノ如ク國家的監視ノ下ニ立ツカ如キ狀態ニ入リテハ此ノ望モ亦遠サカルヘシ從テ現在ノ忍從ト苦難トハ五十年後ニ全ク新シキ姿ニテ日本國民ヲ起タシメル所以ニシテ此ノ爲ノ基本條件丈ケハ之ヲ我等カ次ノ世代ニ遺ササルヘカラスト信ス茲ニ爲政當局ニ於カレ大決意ヲナサレンコトヲ偏ニ祈ラサルヲ得サル次第ナリ

以上國家浮沈ノ大事ヲ前ニシテ申上クヘキコトモ率直大膽ナルヲ要スルヲ以テ自ラ好マサル言ヲモ敢テ致セリ具體の方策ニ付テハ敢テ茲ニ申上ケサルモ交渉ハ祕密ト迅速トヲ要シ國際關係ヲ考慮スル必要アル處此ノ點當瑞西ニ於テ交渉開始サレルコトノ極メテ適當ナルコトノミヲ進言致シ置キ度シ

尚茲ニ強調致シ置キ度キハ交渉ノ祕密ニハ成功スルモ發表ノ瞬間ニ於テスラ蘇聯カ我方ニ最後的申入レヲナスコトノアリ得ルハ當然豫想ニ容レ置カサルヘカラス其ノ場

合之ヲ決シテ戰爭ニ導カサル様取計フノ腹ヲ定メ置クコト絕對必要ニシテ又交渉中例ヘハ蘇滿國境ニ不慮ノ事態發生セサル様特別ノ戒心ヲ要スルコト又申上クル迄モ無カルヘシ

#### 四、對內指導

結尾ニ申上ケンニ身命ヲ捧ケ敢鬪セラレツツアル將兵ハ素ヨリ純情ナル一般國民ニ取りテ今政府カ和平ノ手段ニ出ツルハ遺憾至極ナリトノ考アランコト真ニ想察ニ餘リアル所ニシテ吾人海外ニ在ル者モ悲報ヲ聞ク毎ニ襟ヲ直スト共ニ事ノ必要ニ想到シテハ同シ心境ニ苦メリ左リ乍ラ幾多護國ノ英靈ノ盡忠モ一一以テ祖國ヲ安泰ニ導キ其ノ父母子弟ヲ護ラントノ念願ニ外ナラサルヲ以テ今事茲ニ至ル以上ハ爲政當路ニ於テ大決心ヲ致サレ以テ國ノ礎石ヲ守ルト同時ニ此等英靈カ後ニ殘シタル父母兄弟子女ヲ彼等ニ代ツテ護ルコトコソ此等ノ英靈ノ心ニ副フ所以ナリト信セサルヲ得ス而シテ此ノ點ニ關シテハ全言論機關ヲ茲ニ動員シ此ノ間ノ誤解ニ基キ計ラサル事態ノ出來ニ豫メ備フル様舉ケテ努力セシメラレンコトヲ冀フ

最後ニ以上ノ考ハ根本ニ於テハ決シテ不肖獨リノモノニ

非スシテ出過キタル言ナレトモ不肖ノ見ル處歐洲ニ於テ

問題ヲ觀察研究セル同胞ノ大部分カ祕カニ包懷セル念願

ナリト信ス茲ニ海外ニ在ル者ノ唯一ノ任務トシテ敢テ御

叱リヨ覺悟シ御参考ニ不肖ノ確信ヲ開陳、政府ニ於カレ

重大御決心ノ一日モ早カラソコトヲ祈念致ス

編注 緒方竹虎内閣顧問には配布せずとの書込あり。

~~~~~

962

昭和20年7月19日

在スイス加瀬公使  
東郷外務大臣宛(電報)

### 岡本陸軍武官より參謀總長宛電報の事前通知

ベルン 7月19日後7時56分発

本省 7月24日後8時00分着

第七九〇號(至急、親展、極祕、館長符號)

岡本中將ヨリ參謀總長宛電報ニ付申上クヘキ事項詳細二十

付記一

日中ニ發電ス爲念

~~~~~

963 昭和20年7月21日

在スイス加瀬公使  
東郷外務大臣宛(電報)

岡本陸軍武官等による国際決済銀行経済顧問  
ヤコブソンを通じたダレス工作について

別電一 昭和二十年七月二十一日発在スイス加瀬公使  
より東郷外務大臣宛第七九七号

國体護持への米国側認識に關するダレス発言振り

二 昭和二十年七月二十一日発在スイス加瀬公使  
より東郷外務大臣宛第七九八号

ヤコブソンの経歴について

三 昭和二十年七月二十一日発在スイス加瀬公使  
より東郷外務大臣宛第七九九号

ダレスの経歴について

四 昭和二十年七月二十一日発在スイス加瀬公使  
より東郷外務大臣宛第八〇〇号

対日和平に関する「グルー声明」について

昭和二十年七月十一日発在スウェーデン岡本  
公使より東郷外務大臣宛電報第四六七号

「グルー声明」に関する報道について

二 昭和二十年七月二十四日発在スイス加瀬公使  
より東郷外務大臣宛電報瑞西情報第一四九号

「グリー声明」に対する米紙論調について

ベルン 7月21日前 1時13分発

本省 7月24日前 8時00分着

第七九六號(館長符號、親展、極祕)

一、現在岡本中將トハ根本ニ於テ同意見ニテ國際決済銀行ノ

役員タル北村及吉村カ兩人ノ「イニシヤチブ」トシテ其ノ同僚タル中立國人ヲ通シ米國側ノ意向ヲ探ル所ヲ御報告シ政府ニ於カレ大決心ヲナサルニ何等資シ度キ念願ナリ

同中將ニハ全ク本使ノ責任及一個ノ考ニテ同感ヲ來シ置キタルモノニテ與謝野書記官ハ全然不同意鶴岡以下ノ館員ハ何等關知セサルコトヲ貴電合第五〇一號ノ關係モアリ特ニ申上ク尙先方ノ謀略ニ引懸ル惧ナキニアラサルコトト又徒ラ

二、我方カ弱氣ヲ示シタルカ如キコトニナラサル様將又機密保持上ニ注意シ居ルコト勿論ナリ

二、難局打開方ニ關スル考ハ五月十四日電ニテ御參考ニ供シ置キタル處此ノ考ハ今日モ變リナク唯一ツ政府ニ於カレ大決心ヲナサル場合話ノ持出シ方法トシテハ其ノ後ノ

情勢ヲ觀察シ寧口單刀直入主タル相手タル米國ニ話込ムヲ以テ上策ト考フルニ傾キ居リ御参考迄申上ケタシ

三、北村及吉村カ決済銀行ノ瑞典人經濟顧問「ヤコブソン」

(略歴別電ノ通リ聯盟時代原田

公使ト懇意ナリシ模様)ヲ通シ先頃迄米國公使館特別顧問ナル名目ニテ當地ニ滯在シ「ローズベルト」ノ私設代表ナリト噂サレ例ノ北伊獨逸軍對米英軍間最後交渉ノ黒幕タリシコト確シカト認メラル米人「ダラス」(略歴別電ノ通)ニ色々聞キタル結果トシテ北村ヨリ聽取スル所

ニ依レハ「ダ」ノ言ナルモノ殊ニ「ダ」ト會談後ノ「ジヤ」ノ印象、所感中ニハ隨分御参考トナルヘシト思ハルモノアリ現下慥カニ一ノ良キ筋ト認メラルニ付委細北村ノ「メモ」(嚴重保管中)ニ依ル別電第七九七號御查閱ヲ請フ

(別電一)

ベルン 7月21日後0時28分発  
本省 7月23日後1時45分着

第七九七號(館長符號)

## 二 中立国を通じた和平打診

(1)(  
トウ  
タケ)

七月十日「バーゼル」ニテ吉村同席ノ下ニ「ヤコブソン」ト第一回會談豫メ吉村カ岡本氏ノ依頼ヲ受ケテ「ヤ」ニ話シ置キタル「日本皇室及國体ニ關スル米國意見探索ノ件」ヲ更メテ小生ヨリ依頼スル

「ヤ」ハ既ニ數回ニ亘リ「バーゼル」ニ居ル Dulles ノ子

分 Shea ニ會ツテ居ル又「ダ」ノ祕書ハ屢々瑞西ニ來ルノテ「ダ」ハ勿論本件ヲ承知シテ居ルト云フ

北村ハ「ヤ」ニ對シ日米戰爭カ熄ムコトハ單ニ日米兩國ノ利益丈ヶテハナイ惹イテハ歐洲ノ復興世界人類ノ爲ニモナルカ米國力徒ラニ無條件降伏ヲ要求スルトキハ其ノ實現甚夕困難テアル乍併日本皇室及國体ニ影響ナシトノ米國意向力確カニナレハ自分ハ全力ヲ盡シテ戰爭終結ニ導クヘク努力スルト言フ

〔ヤ〕ハ此ノ話ハ「ダ」カ

持チ出スコトカ一番ヨロシイトン「ダ」ノ人物手腕ヲ說

キ特ニ北伊工作ニ關スル同人ノ功績ヲ述ヘ又個人的ニモ昵懇ノ由

同日夕刻「ヤ」ノ報告ハ北村カ「ダ」ニ會フコトハ時期早尚又右一件ヲ國務省ヤ大統領ニ傳ヘ若シ返事ヲ取ルコ

トハ米國ノ政治機構上數週間ヲ要スルノミナラス其ノ間外部ニ洩レル場合「チャーチル」ニモ相談ヲ要シ容易ノ仕事テナク恐ラク不成功ニ終ルタロウト言フ

二、七月十三日「バーゼル」ニテ吉村同席ノ下ニ「ヤ」ト第二回會談

(イ)「ヤ」ハ芬蘭、伊、羅、奧ノ例ヲ引用シ米國ハ之等ノ國ノ爲政者乃至皇室ニ對シ何等干涉シ居ラス此ノ事實

ハ米國側ノ非公式意見ヨリモ遙カニ確カテハナイト力説シ北村ノ提案ヲ寧ロ余計ナコトノ如ク言フ

(ロ)右ニ對シ北村ハ日本ニ於ケル皇室ト國体ノ特殊性ヲ強調シ若シ之カ堅持サル爾ナラハ戰爭終結ノ最大且有效ノ動機トナリ得ルノテアル此ノ問題ニ觸レス徒ラニ日本ニ對シ戰爭ヲ止メタ方カイト云ソテモ何等ノ效果ナカルヘシト説キ漸ク「ヤ」ヲ納得セシメタ

「ヤ」ハ出來ル丈ヶ努力スルト北村ニ誓フ

三、(イ)「ヤ」ハ七月十四日土曜日二時間及十五日日曜日五時間「ダ」ノ「ウイスバアデン」私宅ニ於テ「ダ」ト話ヲシタ由以下(ロ)乃至(メ)ハ右會談ヨリ歸來シ七月十六日「ヤ」ノ北村及吉村ニ内話セル所ナリ

(口)「ダ」カ本件ニ付テ熱心ナコトハ「バアゼル」ニ在ル  
「ヤ」ニ對シ飛行機又ハ自動車ヲ提供セルコト(飛行機  
ハ目立ツ惧アル故往復トモ自動車ニセル由)場合ニ依  
リテハ現在ノ仕事ヲ一切止メテ此ノ仕事ニカカツモ宣  
敷イト「ヤ」ニ云ツタ  
<sup>(4)</sup>コトテモ解カル

(ハ)「ダ」ハ「ヤ」ニ對シ日本ノ爲ニ何モノカヲ救フ唯一  
ノ途ハ七月十日「グルー」聲明書(別電第八〇〇號在  
「ベルン」米國公使館配布一般情報ニ依ル)ニアル意味  
ノ「アンコンヂンヨナルサレンダー」ヲ直ニ受諾スル  
コト「コンペテント オーソリチイ イン デヤパン」  
カ之ヲ受諾スルナレハ自分ハ何時ニテモ「トルーマン」  
ト連絡ヲ取り得ルカ現在「ト」カ「ポツダム」ニ在リ  
「チャーチル」亦同地ニ在ル時カ一番手ツ取り早ク話  
カツキ易イカラ日本カ戰爭ヲ終了スルノハ三國會談中  
カ一番良イノテハナイカト再三繰返シタ由勿論日米ノ  
軍ノ首腦部ハ東亞ノ某地ニ會シ休戰協定ヲナス手續ハ  
アルタロウカ鐵砲ノ打合イハ即座ニ止メルコトカ出來  
得ル今後蘇聯カ一度英米ニ參加スルニ至レハ戰爭終結

(二)<sup>(5)</sup>「グルー」ノ聲明書ハ約一ヶ月前「ダ」カ華府ヘ歸ツ  
タ時「グ」カ練りニ練り草案ヲ作ツテ居タモノテ「ダ」  
モ相談ニ與ツタ由此ノ聲明書中ニ些少タモ日本ノ皇室  
竝ニ國体ニ觸レ居ラサル點ヲ見逃サナイテ欲シイト  
「ヤ」ハ言ウ  
「ヤ」ハ若シ日本側カ皇室ト國体トノ問題ニ餘リ「ス  
チツク」シ過キルト米側ハ之ヲ以テ日本軍人ノ「トリ  
ツク」ト解スル惧レカアル、ト云ウ意味ハ「グ」ノ聲  
明書ニアルカ如ク無條件降伏トハ日本ヲ今日ノ不幸ニ  
導キタル軍首腦部勢力ノ終結ヲ意味スルト云ヒ居ルニ  
對シ日本軍人カ皇室ト國体トノ影ニ隱レ自己勢力ノ存  
續ヲ圖ルニアラスヤトノ疑念ヲ生セシメルト述ヘタ  
(ホ)「ヤ」ハ日本カ「グルウ」ノ如キ友人ヲ持ツテ居ルコ  
トハ此ノ上モナキ幸福デハナイカ「ナチス」獨逸ニハ

一人ノ「グ」ナシ話ヲツケヨウニモ其ノ術カナカツタ  
カ右ニ反シ日本ニ對シテハ「グ」ヲ始メ日本思ヒノ人  
カ居ル「グ」聲明書モ云ハ向フカラ手ヲ差出シテ居  
ルヨウナモノテハナイカト云フ斯フ云フ友人ノ息カ切  
レス中ニ話ヲツケルコトカ必要タト説ク右聲明書ニハ

矛盾ハアルカ其所ハ「グ」ノ苦心ノ存スル所テハナイ  
カト繰返シテ居タ

(?)「ヤ」ハ又英國カ自國皇室ノ關係上日本ノ皇室ノ安泰  
ヲ好ムハ自明ノ理ナリ從ツテ假ニ米國ヨリ講和條件ト  
シテ國体ノ變更ヲ提案スルカ如キコトアリトスルモ英  
國ハ必ス

反對シスル問題ハ日本自身ニ委ネルニ相違ナイタロウ  
ト語ツタ

(?)「ヤ」ハ米國與論ニ對シ好印象ヲ與ヘル最善ノ途ハ如  
何ト問ヘルニ對シ「ダ」ハ the safest way to take the risk  
ト答ヘタ「ヤ」ノ「ダルス」トノ會談テ得タ印象テハ  
(?)米側カ日本皇室ニ對シ反對ノ宣傳ヲ止メ居ラサルコ  
ト(?)宮城ヲ故意ニハ爆撃シ居ラサルコトハ「グルー」  
聲明書中ニ日本皇室又ハ憲法ノコトヲ「メンシアン」

シ居ラサルコトハ重要ナ事實テ「ダ」等ノ感想トシテ  
ハ「グルー」聲明書中ニ提議サレ居ル如キ「アンコン  
デシヨナルサレンダー」ヲ受諾シ此ノ戰爭ヲ能フ限り  
速ニ終止スル場合ニ於テ日本ハ皇室及國體ヲ確保スル  
「ベストチヤンス」  
ヲ有スルト云フノテアル

(?)今回ノ「アプローチ」ハ北村個人ノ考ニテ純然タル  
「プライベイト アンド パーソナル」ノモノナリトシ  
「ヤコブソン」ヨリ「ダラス」ニ篤ト傳ヘシメタ從ツ  
テ「ダ」モ今回ノ探り入レカ「コンペテント アンド  
レスポンスブル オーソリチイズ イン デヤパン」ヨ  
リ出テ居ル何等ノ「エビデンス」ナク「グルー」ノ聲  
明書ニ述ヘ居ル如キ種類ノモノヲ出テヌト云ツタソウ  
テアル尤モ「ダ」ハ北村ノ名前ト存在ヲ約半年前ヨリ  
良ク承知シテ居ル由其ノ上「ヤ」ハ北村及吉村ナル者  
ニ就キ説明シタル由勿論此ノ「アプローチ」カ「ベダ  
ンチツク」ノモノテナイコトハ充分「ダ」モ了解セル  
カ北村ノ背後ニハ何者カ居ルコトモ「ダ」ニ於テ推  
察シ居ル模様ナリトノコト

結局「アンオウセンチツク」ナ「サウンド」トシテハ<sup>(9)</sup>

之以上ノ成果ヲ齎ス譯ニハ行カナイト思ハレルシ又假

ニ半公式ノ會談ニ入ルトモ皇室ト國体ノ問題ヲ確保シ  
得ルヤ否ヤ北村ノ印象トシテハ「ネガチブ」ノ結果ニ  
ナルタロウ何レニシテモ「グル」聲明書ハ熟讀玩味  
ノ要力アル

(リ)追テ本件ニ關シ「トルーマン」ノ「パーソナルオピ

ニオン」丈ケニテモ探り得サルヤ苦心シタルモ「ヤ」

ノ報告ニ依レハ米國ノ政治組織力必シモ大統領ノ考  
通リニ色々ノ事件ヲ解決シ得ナイ仕組ニナツテ居ルト  
共ニ「トルーマン」ナル人物ハ容易ニ斯ル問題ニ對シ  
意見ヲ吐カナイタロウトノ推測ニテ結局不成功ニ終ツ

タ「ダ」ハ初メヨリ「ト」ノ意見探索ノ如キ問題ニシ

テ居ナカツタ由

「ダ」ハ「ヤ」ノ話ヲ

「グル」丈ケニ電報スルト言ツタカ「ヤ」ハ勿論  
「トルーマン」ニ傳ヘタト思フト北村ニ語ソタ

四、「ヤ」カ本件ヲ非常ニ熱心ニ取扱ヒ奔走シテ居ル動機ハ  
大体次ノ三點ニアル様テアル(北村ノ印象)

(イ)彼自身ノ人世觀タル平和及協調  
(ロ)日本人ニ對スル好感

(ハ)今日日本カ戰爭ヲ止メテ吳レレハ歐洲諸國ハトレ丈ケ  
救ハレルカ解ラナイ若シ日本皇室カ御自カラ平和ヲ提  
起サレタナラハ皇室ニ對スル人氣ハ大シタモノタロウ  
ト彼ハ云フ因ニ彼ノ經濟觀察ニ依ルト日本カ今日戰爭

ヲ止メレハ二十五年ニシテ回復シ得ルト云フ彼ハ國際  
決濟銀行ヨリ鹹ニセラルトモ瑞典へ歸レハ立派ニ喰  
ツテ行ク途カアルカラ本件奔走ノ如キ好キテ遣ルノタ  
ト云フ(國際決濟銀行ハ政治ニ關與セスト云フ建前ニ  
ナツテ居ル)

## (別電二)

ベルン 7月21日前1時21分発  
本省 7月24日前7時30分着

第七九八號(館長符號)

Jacobsson ノ經歷(本人カ吉村ニ語レル所ニ依ル)  
瑞典人一八九四年生夫人ハ愛蘭人其ノ弟ハ Sir Abchbald  
Nye 中將ニテ英參謀本部次長ナリ事實上參謀本部ヲ切り廻

シ居レリ

一、瑞典 Npsala 大學卒業

二、一九二〇年一二八年國際聯盟役員金融經濟部員、奧太利  
洪牙利「ダンチヒ」勃牙利等ノ金融復興顧問トシテ歴駐

ス

三、五十四歳ニシテ右ヲ辭シ瑞典國防省經濟部祕書長(少將

格)

四、一九三四年一切ノ公職ヲ辭ス同時ニ國際聯盟軍備縮少部

長又ハ瑞典經濟大臣就任ノ交渉アリンモレモ辭退ス結

局在「バーゼル」國際決濟銀行經濟顧問ヲ受諾ス

五、一九三八年戰雲近キヲ知リ故國ニ歸リ娘ノ教育ニモ便ナ  
ラシメント考ヘ辭表提出「ストツクホルム」ニ借家契約

迄結ヒタルカ各中央銀行總裁ヨリ中立國人ニシテ公平ナ

ル見解ヲ有スル經濟顧問ハ益々必要ナリトノ理由ノ下ニ

留任ヲ迫ラレ辭シ切レス留マル

六、一九三七—三八年

ル)

「アイルランド」銀行委員會委員就任毎年出席幣制改革、  
中央銀行設立ニ努力常ニ De Valera ト會議シ政治問題ニ  
迄及フ De Valera 側近者ノ洩ラセシ所ニ依レハ其ノ識見

人ヲ動カスコト多ク一九三八年一月「アイルランド」英  
國政府間交渉ヲ開始スルニ至ラシメ「アイルランド」經  
濟封鎖ノ危險ヲ避ケシム中央銀行成立ヲ以テ辭任更ニ同  
國政府經濟顧問トシテ留任ヲ懇請セラレ時々「ダブリン」  
へ赴ク現在ニ至ルモ豫算ノ批評ヲ續行「ダブリン」大學  
ヨリ名譽博士ノ稱號ヲ受ク

七、其ノ間瑞典銀行大御所 Marcus Wallenberg(一九四三年死

去)Montagne Norman ノ知遇ヲ受ケ研究ニ至大ノ便ヲ與

ヘラル一九三九年七月 Norman ニ萬一開戰ノ曉ニハ Sir

Frederick Thilips ヲ華府ニ派遣金融問題ノ交渉ニ當ラシム

度ニ最善ト考フル】 suggest シ置キタル處右實現シ Lend

Lease 協定ノ成功ヲ見タリ

八、一九四一年國際商業會議所「カーネギ」財團ヨリ意見

ヲ求メラレ紐育華府ニ赴キ(本年八月「ロツクフェラー」

財團ヨリ戰後金融經濟問題意見上申ノ爲紐育華府ニ招カ

ル)

九、一九四五年五月芬蘭外務省ヨリ諮詢ノ爲招レ各大臣ト數  
度ニ亘リ討議 Paarikivi 首相トハ二回ニ亘リ討議已ムナ  
ク芬蘭外務省ト「ヘルシンキ」駐在英國代表トノ交渉ノ

仲介迄引受ケタリ

三、四月中倫敦滯在中英蘭銀行内ニ宿泊ヲ許サレ自由ニ  
總裁ト午餐ヲ許サレ事務上大ニ助カリタリ

六、前伊太利銀行總裁「アツオリニ」カ獨ト協力セリトノ廉  
ヲ以テ裁判ニ付セラレタル際彼ヲ助ケル爲努力シ「ア」  
ハ死刑ヲ免レタリ

(別電II)

ベルン 7月21日前1時10分発

本省 7月24日前9時10分着

第七九九號(館長符號)

Dulles ノ略歷(Jacobsson ノ吉田村ニ語レル所ニ據ル)

Dulles, Allen Welsh 米國人辯護士

一八九三年四月生

「アーリンストン」其ノ他ノ大學ニ遊學ス

一九一〇年五月十七日國務省ニ入ル

一九一八年十二月平和交渉委員トシテ曰里ニ來ル

一九一二一一六年國務省近東局長、其ノ後ハ壽府駐在、各

種ノ國際會議委員ニ歴任ス

一九一七年第三回海軍協定會議ノ法律顧問其ノ他國際的ニ

米國ヲ代表ス

一九一七年八月辯護士トナル

Henry Schroeder banking corp, Schroeder trust Co, ノ重役ト  
ナル

一九四五年

瑞西駐劄米國公使特別顧問ノ資格ニテ「ベルン」ニ滯在シ  
居タルカ其ノ意見ハ米國政府ニ重視セラレタリ現在ハ米占  
領軍關係中央機關ノアル「フランクフルト、アム、マイン」  
附近ニ滯在中ナリ

(別電IV)

ベルン 7月21日後0時28分発

本省 7月23日後4時20分着

第八〇〇號

Asked to comment upon continued newspaper and radio  
reports that this Government has received peace offers from the  
Japanese Government, acting Secretary Grew, today July 10,  
1945 made the following statement:

"The situation today is exactly the same as it was on June 29 when I made my last statement on this subject. We have received no peace offer from the Japanese Government, either through official or unofficial channels. Conversations relating to peace have been reported to the Department from various parts of the world, but in no case has an approach been made to this Government, directly or indirectly by a person who could establish his authority to speak for the Japanese Government, and in no case has an offer of surrender been made. In no case has this Government been presented with a statement purporting to define the basis upon which the Japanese Government would be prepared to conclude peace. The alleged peace feelers have invariably been inquired as to our position. On one occasion leading Japanese industrialists were reported as wanting to know the best possible condition, the Allies would advance or compromise peace. On another occasion, the representative in Tokyo to a neutral government reported that he had been told by a private Japanese individual that the Japanese could not accept unconditional surrender because it would mean loss of face. On

still another occasion a member of the staff of the Japanese Mission to a neutral country intimated to an American citizen through a German newspaper man that real American interest in the Far East should lead the United State to abandon unconditional surrender and propose terms for a negotiated peace.

Finally an unidentified person approached an American Mission in a neutral country, claiming that he had been authorized (by whom was not indicated) to approach the government of the neutral country with a view to persuading the Allies to drop unconditional surrender and to propose terms. It should be borne in mind in this connection that the Japanese, like the German before them, rely upon the hope that they may be able to divide the allies and to produce division of opinion within the allied countries. To that end, it would be to their interest, as they see their interest, to initiate a public discussion of the terms to be applied to Japan. This they have already attempted to do on several occasions through radio Tokyo. Furthermore, it should be remembered that peace feelers

are familiar weapons of psychological warfare and will be used as such by the Japanese, particularly now that their military position is deteriorating and the condition of their civilian population becomes more critical. I pointed out in a speech on Navy Day a year ago — on October 27, 1944 — that efforts would undoubtedly be made by the Japanese to work dissatisfaction between the allies. In that speech I said: Wish to take this important occasion to repeat, with all possible force, the warning which I have continually tried, all over the country, to drill home into the consciousness of our people, namely, that we must not, under any circumstances, accept a compromise peace with Japan, no matter how alluring such a peace may be or how desirous we may become of. Some of them, perhaps only a few at the present time, but the number will grow steadily know beyond peradventure that they are going to be defeated. Before the complete ruin of Japan, these men are almost certain to make an attempt to save something from the wreckage. They would probably offer to withdraw their troops from the occupied areas and return those areas to their frontier status. They might

(former<sup>70</sup>)  
Manchuria. All this they might offer to do if only we would agree to leave their homeland free of further attack.

Should that moment come, America, the united nations, would be put to a most severe test. The temptation to call it a day might be stronger than we can now visualize. That, my friends, would be the moment to fear, not for ourselves but for our sons and grandsons, lest they should have to fight this dreadful war over again in the next generation. For assuredly if

we should allow ourselves to relax before carrying to completion our present determination to render the Japanese impotent ever again to threaten world peace, that would be the fate of our descendants. That cancerous growth of Japanese militarism would follow the example of the German war machine after 1918, perpetuate itself and prepare Japan again for some future Armageddon. I have no fears as to the nature of our decision, so long as our people fully understand the dangers of a compromise peace, but let us be warned in time. The nature of the purported peace feelers must be clear to everyone. They are

the usual move in the conduct of psychological warfare by a defeated enemy. No thinking American, recalling Pearl Harbor, Wake, Manila, Japanese ruthless aggression elsewhere, will give them credence.

Japanese militarism must and will be crushed. The policy of this government has been, is, and will continue to be unconditional surrender. Unconditional surrender does not mean, as the President pointed out in his message of June 1 1945, the destruction or enslavement of the Japanese people.

The President stated this very specifically on May 8 when he said answer to the question "just what does the unconditional surrender of the armed forces mean for the Japanese people".

"It means the end of the war. It means the termination of the influence of the military leaders who have brought Japan to the present brink of disaster. It means provision for the return of soldiers and sailors to their families. It means not prolonging the present agony and suffering of the Japanese in the vain hope of中立国を通じた和平打診  
中立国を立國ニ於テ或ル匿名ノ人物カ米國外交官ヲ尋ネ聯合側カ無條件降伏ヲ捨テ他ノ條件ヲ提示スル様中立國政府ヲシテ斡旋セシムベキ權限ヲ附與セラレタリト語リタルコムアリスル日本ノ「ピースワイーラー」ハヨリ良キ條件ヲ得ンカ爲聯合側ヲ分裂セシメントスルモノニ他ナラス米國政府ニシテハ現在ハ勿論將來ニ於テモ無條件降伏ヲ堅持スル

The policy of this Government has been, is, and will

continue to be, unconditional surrender as defined by the President in these statement. That is the best comment I can make upon peace feelers and rumors of peace feelers of whatever origin".

### (支那)

スマックボルム 7月11日後5時30分発  
本省 7月12日前7時00分着

### 第四六七號

十一日當地名紙ハ華府發電トシテ左ハ如ク報シ居ニテ  
十日「グルー」ハ米國政府トシテ日本政府ヨリ公式又ハ非  
公式リ和平提議ニ接シタルコト無キモ國務省ノ得タル報告  
ニ依レバ「一三」筋ヲ通シ和平交渉ニ關スル詰合ハアリ現  
ニ某中立國ニ於テ或ル匿名ノ人物カ米國外交官ヲ尋ネ聯合  
側カ無條件降伏ヲ捨テ他ノ條件ヲ提示スル様中立國政府ヲ  
シテ斡旋セシムベキ權限ヲ附與セラレタリト語リタルコム  
アリスル日本ノ「ピースワイーラー」ハヨリ良キ條件ヲ得  
ンカ爲聯合側ヲ分裂セシメントスルモノニ他ナラス米國政  
府ニシテハ現在ハ勿論將來ニ於テモ無條件降伏ヲ堅持スル

モノナリト言明セリ

(付記二)

ベルン 7月24日後3時57分発

本省 7月25日後5時35分着

瑞西情報第一四九號

(一)「十三日)日本ノ和平説ニ對スル「グルー」聲明ニ關スル米紙論調(十三日十四日二十四日BKB)

「(ワシントンスター)十一日「グルー」聲明ヨリ結論ヲ下シ得ルトセハ米國政府ハ無條件降服ヨリ一步モ退カサルヘシトノ點ナルカ同聲明ハ明確ヲ缺ク嫌アリ米國ハ既ニ無條件降服トハ日本國民ノ根絶又ハ奴隸化ヲ齎スモノ

ニ非スト正式ニ聲明セルモ右カ何ヲ意味スルヤヲ理解セ

シムル包括的聲明ニハ非ス故ニ若シ米國政府カ日本ニ課

セントスル條件ヲ適當ニ明示セハ日本ノ降服時期ヲ促進

スルニアラスヤトノ責任アル筋ヨリノ「サゼスチヨン」

モアル程ナリ右ハ素ヨリ妥協和平ヲ云フニ非ス其ノ點確然タル區別ヲ爲スヘキコト當然ナリ然リ乍ラ「グルー」ノ口吻ヨリ考フルニ米國政府ハ日本ニ對シ斯ル讓歩ヲ示

無條件降服ハ既ニ聲明セラレタル對日和平ノ一般性質ト

ス意嚮ナキ模様ニテ今次大戰ヲ指導スル米國要人ノ閱歷ヨリ見テ政府ノ取ル態度ハ充分理由アリトノ信頼感ヲ起サシメントスルモノノ如シ

二、「ワシントンポスト」十三日

「グルー」聲明ノ如ク日本ノ米國ニ對スル「アプローチ」カ正式機關ヲ通セス曖昧ニシテ内容ノ乏シキモノナリト

セハ右ハ和平ノ強制タルニ充分ナラス國務省カ之ヲ無視シタルコトハ正當ナラン但シ同聲明ハ米國ノ追求スル戰爭目的ヲ單ニ日本ニ對シテノミナラス米國民就中戰線ノ

米將兵ニモ示スヘキヤノ主要問題トハ何等ノ關聯ナシ吾人ハ聲明ヲ「フェースバリュー」ニ受取ラサルヘカラス

三、「バルチモア、サン」十二日

何人モ太平洋戰爭ノ早期終了ヲ要望シ米國將兵ノ生命ヲ救フ爲ノ政策ニ好意ヲ有シアルモ無條件降服以外ノ和平條件ヲ唱道スル聲ハ聞カレ居ラス米國側ニテ和平條件ニ關シ取リヲ爲サントノ意嚮ヲ示サハ日本ハ右ヲ以テ米國ノ戰爭疲勞又ハ弱體ノ徵候ナリト解釋シ却テ頑強ナル抵抗ヲ爲スヘシ

竝立スルモノニテ右カ「カイロ」宣言ニ見ラレ居ルハ日

本モ之ヲ知悉シ居レリ「ローズヴエルト」及「トルーマ

ン」モ累次ノ聲明ニテ無條件降服ヲ繰返シ居レリ聯合側

トシテハ右聲明ヲ超ユル行爲ヲ爲ササルヘシ日本ノ指導者カ不可避ナル事實ノ前三速カナル調整ヲ爲サハ日本國民生活ノ再建ニ着手シ得ル物質的基礎ハ夫レ丈ヶ失ハルル處少シ

四、紐育「タイムス」十九日

日本ハ米國政府ニ對シ非公式ニモ和平ノ打診ヲ行ヒタルコト無シトノ「グルー」ノ否定アリタルモ和平ノ噂ハ猶盛ニシテ華府及倫敦ニテハ日本ヲ武装解除シ其ノ占領地域ヲ剝奪スルモ獨逸ト異リ右以外ノ要求ヲ爲サストノ妥協和平ノ風説アリ若シ右ニ依リテ太平洋戦争ノ早期終了成功シ將來日本カ無害ナル存在トナルトセハ之ヲ考察スル充分ノ價值アリ嘗テ「ローズヴエルト」カ獨逸ニ對シ述ヘタル如ク「トルーマン」ハ無條件降服ハ日本國民ノ根絶又ハ奴隸化ニアラスト聲明セルカ若シ日本カ斯カル條件ノ上ニ降服スルトセハ此ノ上無ク結構ト言ヒ得ヘシ

964

昭和20年7月21日

在スウェーデン岡本公使より  
東郷外務大臣宛(電報)

### 早期和平実現の必要性につき意見具申

ストックホルム 7月21日後4時25分発

本省 7月22日後2時30分着

第四八九號(館長符號、親展)

大東亞戰局ノ現状ハ悲憤慷慨ノ極ミニシテ眞ニ國家危急存亡ノ秋ナルヲ思ハシム之日本カ米英ノ挑發アリタルニセヨ止マルヘキ所ニ止マラス敵ノ實力ヲ誤算輕視シ戰フヘカラサル無理ナル戰爭ニ突入シタル結果ニシテ爲ニ今ヤ殆ント世界ヲ敵トシテ戰フノ余儀ナキ羽目ニ陥レル現状ト言フヘク日本ノ戰爭目的カ如何ニ堂々タリトモ遺憾乍ラ萬事ハ實力ヲ以テ決セラルル次第ナリ又蘇聯ト米英トハ將來ニ於テ結局衝突ヲ免レサルヘキ運命ニアリト思ハルモ歐洲戰爭ニ極度ニ疲勞シタル蘇聯カ今後數年間ニ英米ト事ヲ構フルモノトハ考ヘラレス此ノ現實ノ事態ニ處シテ我陸海軍ニ於テ回瀾ヲ既倒ニ返シ戰局ヲ根本的ニ我方ニ有利ニ好轉セシムル心中ヨリ成算アルニ於テハ何ヲカ憂ヘシ然ラサルニ於テハ日本ノ採ルヘキ途ハ最後ノ玉碎ヲ覺悟シテ飽迄頑張ラ

レ此ノ無理ナル戰爭ヲ戰ヒ拔クカ又ハ適當ノ機會ヲ捉ヘテ

ナルヘク有利ナル條件ヲ以テ和局ヲ結フカノニ途アルノミ  
ト思ハル

最近米國ニ於テ對日無條件降伏ノ條件ヲナルベク緩和シテ  
速ニ和局ヲ結ハントスル意向現ハレ居ルハ屢次ノ拙電ノ通  
リニシテ之ヲ以テ直ニ米國輿論カ全部之ニ贊成スルモノト  
速断スルハ素ヨリ早計ナルヘキモ右ハ米國民中ニ漸ク戰爭  
ニ飽キ戰爭終結ヲ急カントスル希望強キモノアルヲ示スト

共ニ硫黃島沖繩等ニ於ケル日本軍ノ壯烈鬼神ヲ泣カシムル  
孤軍奮闘力米國上トヲ震駭シ此ノ上ノ人命ノ犠牲ヲ回避セ  
ントスルノ考慮ヨリ出テ居ルハ明カナリ從來日本ニ對シ最  
モ敵愾心強キ米國カスル意向ヲ以テ「ボツダム」會談等ニ  
於テ英國側ニテ對日方針ヲ談議スルニ於テハ英國モ亦之ニ  
追隨スヘキハ想像ニ難カラス又頻リニ風説トシテ傳ヘラル  
ル所ノ和平ニ付テ蘇聯ヲ調停者トスルコトモ拙ク行ク時ハ  
日本トシテ蘇聯ニ足許ヲ見透カサレ付ヶ込マルル危險アル  
ヘキヲ考慮セサルヲ得サルモ若シ蘇聯カ眞ニ好意ヲ以テ調  
停ヲ引受クルニ於テハ此ノ際日本ノ爲ニ米英ヲ押ヘテ和局  
ニ持チ行キ得ル者ハ結局「スターイン」ヲ措キテ他ニハナ

カルヘキカト觀測ス

之等ノ點ハ小官ノ申上クル迄モナク既ニ閣下ニ於テ十分御  
考慮相成リ居リ先般ノ所謂政府ノ對蘇策略トハ斯ルコトヲ  
モ意圖スルモノナルヘシトハ拜察スル處今ヤ日本ノ運命ノ  
岐ル超重大危局ニ際會シ帝國外交カ眞劍ニ活動スヘキ秋  
ナルヲ思ヒ苟モ適當ノ機會アラハ眞ニ決死の一大決心ヲ以  
テ最善ト判斷セラル所ヲ斷行シ以テ國ヲ救フノ途ヲ講ス  
ヘキナリト考ヘサルヲ得ス

獨逸ノ悲慘ナル破壊狀況等ニ關シテハ最近歸朝者ヨリ充分  
報告ヲ御聽取相成タルコト推測スル處曰本ヲシテ此ノ悲  
慘ナル運命ヲ辿ラシムベカラストハ小官ノミノ念願ニハア  
ラサルヘク若シ夫レ國民ヲ此處迄引張リ來リタル以上今更  
和平等ト言フ弱音ハ吹ケス曰本國民トシテハ何處迄モ頑張  
ラサルベカラスト言フカ本當ノ現狀トセハ更ニ一段ト大所  
高所ヨリ冷靜ニ現實ノ日本ノ實情ト敵ノ實情トヲ充分ニ直  
視スルト同時ニ畏多キコト乍ラ我皇室ノ御安泰ト曰本國民  
ノ將來ニ付テ深ク思ヒヲ致スノ要アルコトヲ衷心ヨリ進言  
致度シ國民輿論ハ群衆心理ニ依リ强硬意見ニ左右セラレ易  
ク和平論ハ敗戦主義トシテ一概ニ排斥セラル方常トス依

## 二 中立国を通じた和平打診

テ和局ヲ結フニ付テ國內輿論ニ重大障碍アルニ於テハ非常手段トシテ上御一人ノ御親裁ヲ奏請シ陛下ノ御命令ニ依ルコトヲ定ムルノ手段ヲ執ラルルコトモ考慮ノ余地ナキヤスクノ如キコトヲ申進スルハ僭越ノ沙汰ナルハ萬々承知スルモ國家ノ前途深憂ニ堪ヘス徒ニ形勢ノ推移ヲ見送リ居ルコトハ君國ニ酬ユル所以ニアラス在外使臣中一人位ハ思切りタル意見ヲ吐露スル者アリテ然ルヘシト信スルニ付敢ヘテ卑見申進ス

965 昭和20年7月23日

(東郷外務大臣より  
在スイス加瀬公使宛(電報))

### 藤村海軍武官によるダレス工作につき委細探索方訓令

別電 昭和二十年七月二十三日発東郷外務大臣より  
在スイス加瀬公使宛第三七一号  
ダレスの経歴について

本省 7月23日後4時00分発  
成度

一、最近貴地海軍武官ヨリ「ルーズベルト」ノ在歐州特使  
第三七二號(極祕、館長符號)

(欄外記入)

(欄外記入)

Dulles ナル者ヨリ確實ナル第三者ヲ介シテ同武官ニ對シ「日本側ニ於テ米國ト絕對祕密裡ニ話合ノ意向アラハ華府政府ニ傳達スヘク東京ヨリ海軍高官ヲ瑞西ニ派遣ノ意圖アラハ飛行機其他ノ準備ヲ引受ケル」旨申出タル趣ヲ以テ措置振ヲ請訓越セル處海軍中央ニ於テハ當方ト連絡ノ上『敵ノ謀略及離間工作頻ニ行ハレ且主目標ヲ帝國海軍ニ置キアルヤニ認メラルニ鑑ミ中央トシテハ本件ハ取上ケサル意向ナルカ此ノ種工作ニ對シテハ駐在帝國官憲ト密接連絡シ周到ニ觀察スヘン』トノ趣旨ノ回訓ヲ發セルト共ニ本件處理ヲ外務省ニ一任シ來レリ  
二、就テハ委細貴地海軍武官ヨリ御聽取相成度(海軍側ヨリ更メテ同武官ニ訓電ヲ發スヘシ)本件 Dulles ナル人物ノ確實性ニ關スル見込(當方調査ニ依レハ略歷別電第三七一號ノ如キ John Foster Dulles ノコトカトモ思惟シ居ル處果シテ然リヤ)本件相手方ヲ通シ米國當局ノ和平問題ニ關スル眞意ヲ採り得ルヤニ關スル貴見等至急御回電相成度

發電前海軍ニ見セ海軍ヨリ先ツ藤村武官ニ對シ再應公使ニ相談

方訓電ヲ發セシムルコトト致度

有馬大佐ヨリ發電濟ナル由電話アリ 廿二日

ベルン 7月31日後6時20分發  
本省 8月6日前11時10分着

貴電第三七二號ニ關シ  
第八四六號(館長符號)

(別電)

本省 7月23日後2時50分發

第三七一號(館長符號)

弁護士、一九一九年賠償委員會、最高經濟評議會委員、一九三三年柏林賠償會議代表等ノ經歷ヲ有シ一九四四年大統領選舉ノ際共和黨外交顧問トシテ活躍シ「デューアイ」當選ノ場合ハ國務長官ニ目サレタリ

「デュ」ノ意ヲ受ケテ外交ニ關シ政府ト連絡協調ニ當リ桑港會議米國代表部顧問タリ

軍武官ナク當館海軍顧問ナルカ藤村輔佐官著任後同人ノ性格上並ニ西原武官カ技術官ナル關係ヨリ種々問題ヲ惹起シ居レリ)「イニシアチブ」カ米國側ヨリ出テタルモノトハ認メ難キニ付黙殺セラルコト然ルヘント存ス尙「ダラス」ノ人物等ニ付テハ往電第七九九號ニテ御承知ノ通り又確實ナル第三者トハ豫テ防共協定當時日獨ノ間ニ連絡係タリシ獨人「ハツク」ニシテ從來當地ニ於テ海軍側ノ使用シ居リタル經緯アリ本件ハ同人カ「ダラス」ノ祕書ト友人ナル關係ヲ利用セルモノト認メラル

966

昭和20年7月31日

(在スイス加瀬公使より  
東郷外務大臣宛電報)

藤村海軍武官によるダレス工作については黙殺が然るべしとの報告について